

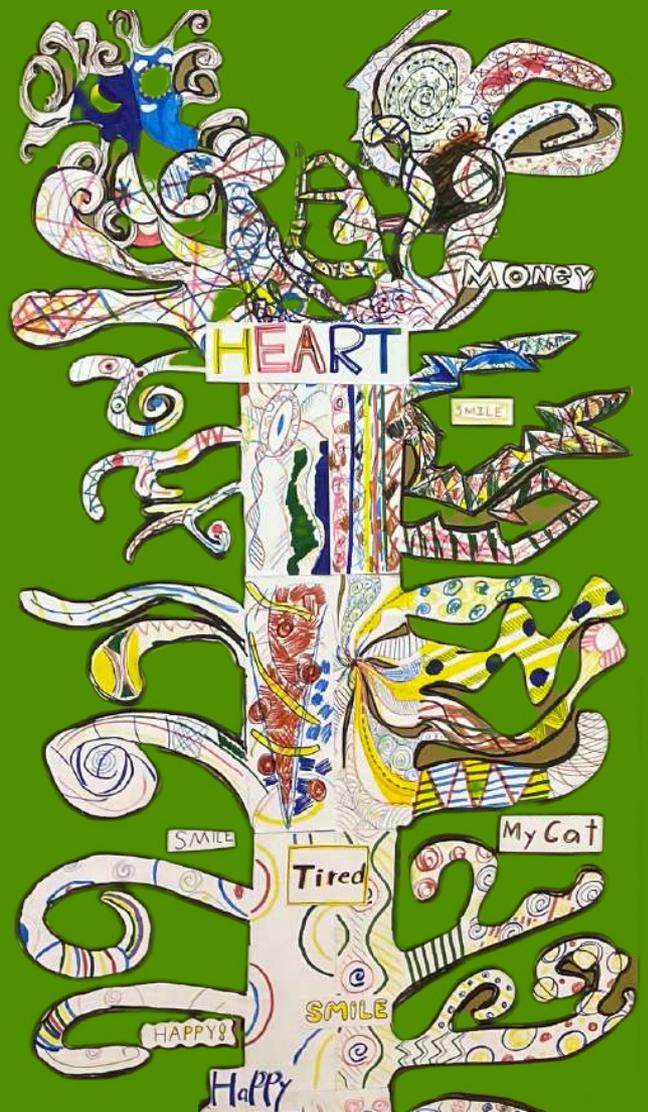
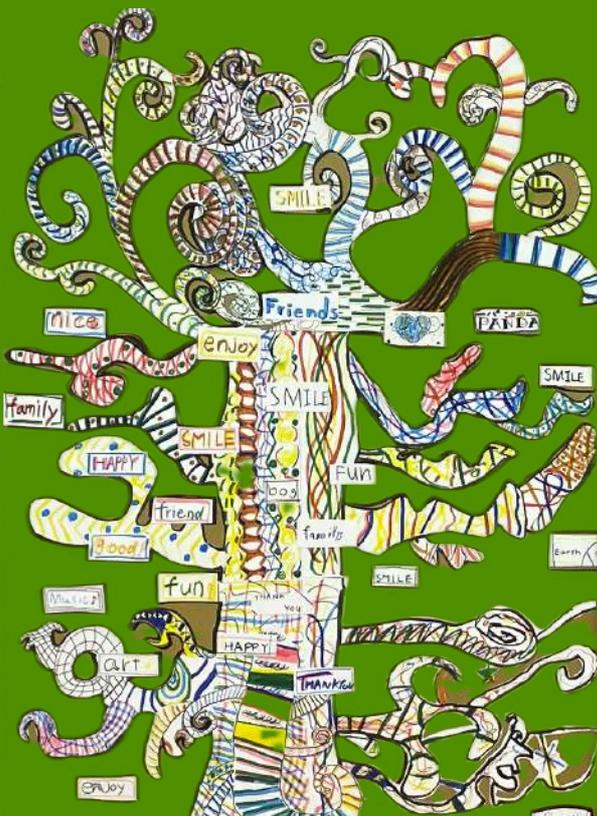
アート × ことばの アクティブ・ラーニング Active Learning Through Art and Words

創作を軸にした小学生のワークショップ実践集
A Collection of Elementary Workshop Practices Centered on Creativity

監修：岩坂泰子 同志社女子大学
Supervised by Yasuko Iwasaka

アート指導：ドミニク・ルトランジェ
Art Instruction by Dominique Lutringer

実践報告：「英語でアート」
Practical Report by "Art in English"



アート x ことばのアクティブ・ラーニング

創作を軸にした小学生のワークショップ実践集

監修：岩坂泰子 同志社女子大学

アート指導：ドミニク・ルトランジェ

実践報告：「英語でアート」チーム

Active Learning Through Art and Words

A Collection of Elementary Workshop Practices Centered on Creativity

Supervised by Yasuko Iwasaka

Art Instruction by Dominique Lutringer

Practical Report by 'Art in English' team

ごあいさつ

本冊子は、科学研究費助成事業基礎研究（C）（課題番号19K007600）「図画工作科との連携による外国語授業における児童の発達の研究」（研究代表：岩坂泰子）（2019–2023年度）の助成によって作成したものです。問題の所在と本研究の目的、および理論的枠組みは、あとの論考「絵と言葉を組み合わせた表現活動が拓くこどものメタ言語意識—言語の身体性に着目した初等外国語の学習・発達に向けて—」（学会誌投稿中）をお読みいただければ幸いです。この論考で示した枠組みに従って、研究代表者は教育団体「英語でアート」に委託し、共に活動内容を企画いたしました。本研究において「アート」とは、創造的な表現や感情の表出を通じて美的・精神的な価値を追求する作品及び活動とします。今回のプロジェクトでは身近な素材を用いたヴィジュアルアート制作を中心に行う活動です。企画した活動は、奈良市立左京小学校の全学年の授業にて実践させていただくことができました。活動内容は、各学年の発達段階を考慮し我々が考案したものを、学年団の先生方の助言を得て決定いたしました。画材の準備や授業日程の調整などについても多くのご協力をいただいて実現させることができました。心より感謝申し上げます。

本冊子では、最初に活動を支える理論とねらいを示した後、児童の作品を含めたワークショップ事例の全容を紹介し、この実践についての考察を付しました。これらを踏まえ、2024年2月17日（土）に、学校関係者および本課題の協働研究者を交え、活動報告・意見交流会を開催する運びとなりました。「主体的・対話的で深い学び」につながる探究活動が求められる中、本研究の実践がこどもの心的発達の可能性に対する関心や議論が深まる一助となれば幸いです。

2024年2月 岩坂 泰子

Foreword

This booklet has been produced with the support of the Scientific Research Fund Grant-in-Aid for Basic Research (C), project number 19K007600, "A Study on the Development of Children in Foreign Language Classes through Collaboration with Art and Craft Education" (Principal Investigator: Yasuko Iwasaka) for the fiscal years 2019-2023. The issues addressed and the objectives of this research, as well as its theoretical framework, are detailed in the forthcoming paper "Children's Meta-Linguistic Awareness through Integrated Activities of Art and Language - Focusing on the Physicality of Language in Primary Foreign Language Learning and Development" (currently under submission to an academic journal). Following the framework outlined in this paper, the principal investigator commissioned the educational organization "Art in English" to collaboratively design the activities. In this research, "art" is defined as activities and works that pursue aesthetic and spiritual values through creative expression and emotional articulation, with a particular focus on visual art creation using readily available materials.

The planned activities were successfully implemented in classes across all grades at Sakyo Municipal Elementary School in Nara City. The content was devised by us, taking into account the developmental stages of each grade, and finalized with advice from the teachers' association. We were able to realize these activities thanks to considerable cooperation in preparing materials and scheduling classes, for which we are profoundly grateful.

In this booklet, we first present the underlying theories and objectives of these activities, followed by a comprehensive introduction of workshop examples, including children's works, and our reflections on the practice. Building on this, a meeting for activity reporting and exchange of views is scheduled for February 17, 2024 (Saturday), involving school stakeholders and collaborative researchers of this project. In an era where inquiry-based learning leading to active, dialogic, and deep learning is sought after, we hope that the practice of this research will contribute to deepening interest and discussion regarding the potential for mental development in children.

February 2024 Yasuko Iwasaka

目次 | Contents

- 03 **ごあいさつ 岩坂 泰子**
Foreword Yasuko Iwasaka
- 05 **絵と言葉を組み合わせた表現活動が拓くこどものメタ言語意識
－言語の身体性に着目した初等外国語の学習・発達に向けて－ 岩坂 泰子**
Children's Metalinguistic Awareness Unfolded through Combined Expressive Activities of Drawing and Verbalization: Towards Learning and Development in Elementary Foreign Language Education with a Focus on the Corporeality of Language Yasuko Iwasaka
- 13 **アクティブ・ラーニングの促進とグローバルな視野の育成 ドミニク・ルトランジェ**
Empowering Active Learning and Fostering a Global Perspective Dominique Lutringer
- 14 **ワークショップ「英語でアート」のねらいと効果 「英語でアート」チーム**
Workshop 'Art in English' Aims and Benefits 'Art in English' team
- 16 **絵と言葉を組み合わせたワークショップの事例**
Lesson Case Studies
1年生：大好きな生きもの（生きものたちが出す音）
Favorite creatures
- 30 **2年生：見たこともない魚たち（スイミーを元気にするメッセージ）**
Fish like I've never seen before
- 36 **3年生：色と音の街（わたしの建物から出る音）**
Colorful city buzz
- 42 **4年生：1/2 成人式（できるようになったこと）**
Half coming-of-age ceremony
- 48 **5年生：シンメトリーな仮面（わたしのモットー）**
Symmetrical mask
- 54 **6年生：生命の樹（わたしの大切なもの）**
Tree of Life
- 60 **みんなのギャラリー**
Whole School Art Showcase at Nara Municipal Sakyo Elementary School
- 66 **現場の声 奈良市立左京小学校 1年生担任 丹野 恵美, 2年生担任 坂本 駿也, 5年生担任 安部ひかり**
Insights from the Classroom
Contributions by Teachers: Grade 1- Emi Tanno, Grade 2 - Shunya Sakamoto, Grade 5 - Hikari Abe
- 69 **ふりかえり 奈良市立左京小学校 校長 佐々木 幸充、教務主任 堀内 大輔**
Reflections on the 'Art in English' Workshops at Nara Municipal Sakyo Elementary School
Contributions by Principal Yukimitsu Sasaki, Academic Coordinator Daisuke Horiuchi
- 71 **ワークショップ「英語でアート」を実施して 奈良市立済美小学校 校長 勝谷 征彦**
Implementing 'Art in English' Workshops at Nara Municipal Seibi Elementary School
Contribution by Principal Masahiko Katsutani
- 72 **協働作品例 奈良市立済美小学校、曾爾村立曾爾小中学校**
Whole school artwork
Nara Municipal Seibi Elementary School, Soni Municipal Soni Elementary and Middle School

絵と言葉を組み合わせた表現活動が拓くこどものメタ言語意識

－言語の身体性に着目した初等外国語の学習・発達に向けて－

Children's Metalinguistic Awareness Unfolded through Combined Expressive Activities of Drawing and Verbalization: Towards Learning and Development in Elementary Foreign Language Education with a Focus on the Corporeality of Language

岩坂泰子 (同志社女子大学) Yasuko Iwasaka Doshisha Women's College of Liberal Arts

1. はじめに (問題の所在と本研究の目的)

初等教育で外国語が教科となった今回の学習指導要領 (2017年告示) が全面実施となってから4年が経とうとしている。日本では、日本語以外の言語と接触する状況は教室に作られた人工的な設定を除いては限定的であり、こどもにとって「原則英語」とされている「外国語」学習に対する必要性や切迫度は低い。文部科学省は今回の改訂に至る審議の中で、外国語教育の目標に「メタ言語意識」の向上を提案した (文部科学省, 2016)。その背景となる根拠には、以下のような考え方がある。すなわち、社会生活を営むために求められる英語の必要性は低くても、「メタ言語意識」つまり「個別の言語の特徴を相対的に捉えることによって、言葉とは何か、言葉が人々の生活の中でどのように働いているかなど、言葉そのものへの意識が呼び起こされること (p.14) が、自律的な外国語の学習者になるための資質、能力を養う、あるいは全てのこどもが言語に対する関心を高めるという点で重要であるというものである。

言語意識教育に詳しい福田 (2007) は、1970年代のイギリスに移民が急激したことによって「国語」にあたる英語教育が十分な成果をあげていないという問題意識から、「言語意識」に着目した教育運動が、言語学者を中心に英語教育者や外国語教育者、出版社などから草の根的に広まったと説明している。1980年代には言語意識 (Language Awareness) 学会が立ち上がり、更なる議論がなされている。2000年代以降、この概念は欧州 (EU) の言語政策の支柱となる複言語複文化主義^[1]に基づく外国語教育を実現するための拠り所として受け継がれ、発展する。日本の学習指導要領で謳われている「メタ言語意識」はこの文脈による考え方を参照していると思われる。言語意識学会

(Association for Language Awareness: ALA) では、言語意識を「言語についての (about language) 明示的知識と、言語学習、言語教授、言語使用における意識的な理解 (conscious perception) と感受性 (sensitivity)」 (福田, 2007, p.103) と定義している。文科省の記述をALAの定義に照らしてみると、個別の言語に特化せず、一般的に言語あるいは言葉そのものへの意識が呼び起こされる、すなわち言語「について」の「意識的な気づき (conscious awareness)」や「理解 (perception)」という点は共通しているが、意識化が起こるために極めて重要な「感受性 (sensitivity)」についての指摘が見られない。そこで本研究では、「メタ言語意識」を「身体を通して感じ取ることを通じて意識化される、言語 (言葉) についての自らの感覚、気づきおよび理解」と定義する。

[1] 欧州評議会が打ち出した『ヨーロッパ言語共通参照枠』 (Common European Framework of Reference for Languages: CEFR, 2001) は、複言語能力を、特定の社会の中で異種の言語が共存している多言語主義とは一線を画し、個人がバラバラに持っている複数の言語文化的レパートリー全てを包括する一つの能力であるとしている。

言語の学習がこどもの心的発達を促すためには、母語であれ、外国語であれ、身体感覚が生じる言語体験を通して、一つの言葉にこども自身がどれだけ内実のある意味を見出せるかが鍵になる。ヘレン・ケラーは、恩師との信頼関係の中で、冷たい水に触れながらwaterという言葉を知った時、初めてその意味を理解した。それを考えると、思考停止状態での言語知識の刷り込みと無感覚な暗唱訓練をいくら積み重ねても、言語についての、あるいは、言葉とは何かに関する本質的な疑問や関心、すなわちメタ言語意識は芽生えないだろう。とはいえ、母語に比べて言語情報の少ない外国語を言葉のみで理解し、表現することは、そもそも母語自体が発達途上である年少者にとっては極めてハードルが高い。そこで筆者が目にしたのは、心象イメージ、すなわち言葉が生まれる、あるいは言葉になる「前」の身体感覚に根差した萌芽的な言葉表現である。ヒントとなったのは、認知・発達心理学者である今井ら（2023）の「記号接地」という視点による言語習得研究である。認知科学の世界では、言葉（記号）に感覚が結びつく（接地する）ことを「記号接地」（Harnad, 1990）と呼ぶが、今井らは、近著『言語の本質』（2023）の中で、言葉の意味を真に理解するためには、現実世界から受け取る情報について身体的な感覚を持つ必要があると主張する。今井らが着目したのはオノマトペである。オノマトペは従来、言葉になる前の未熟なあるいは幼稚な言葉であるとして言語学の中では周辺的なテーマと捉えられてきた。しかし、かれらは、世界の言語に含まれる音と意味のつながりには言語の普遍的、本質的な特徴があることを見出し、オノマトペという特殊な言葉が人間の言語発達に果たす役割を論じている。

上述したように、筆者の関心は、母語を含め、発達の途上にあるこどもの言葉が生まれる「前」の身体感覚をどのように解放（あるいは外化）させることができるかである。なぜなら、そのことによって生まれる省察がやがてはこどものメタ言語意識の目覚めにつながると考えるからである。本研究では、外国語教育におけるメタ言語意識の向上に資する絵と言葉を組み合わせた表現活動の有効性を検討する。

2. 言葉の発生と発達に関する理論

2.1 言語の身体性とヒトの感覚に見られる普遍的特質

人間は言語に関わらず、ある音に対して共通したイメージあるいは感覚を持つ（音象徴）ことが知られている。この法則によると、例えば母音「あ」は「い」よりも大きく、開放的なイメージを与え、子音のp, t, k, s, b, d, g, zなどの阻害音は角張っていて硬い響き、それに対してm, n, y, r, wなどの共鳴音には丸っこく柔らかいイメージを与える。人類は、この音象徴を利用してオノマトペを作り出し、言語を進化させてきた。今井らは、多くの人に共通した感覚イメージを写しとるオノマトペが、言語の身体性をよく反映しており、言葉を持たない赤ちゃんでも同様の感覚を持つことができることから「『単語に意味がある』という『名づけの洞察』」（p.108）を誘発するという。さらに、言葉に宿る身体性は、人間の感情や感覚をより直接的に訴えることによって、他者との情動的なつながりをより強固なものとし、共感的な関係性の構築に貢献する。このことは例えば、運動・スポーツ領域で使用される擬音語や擬態語を指す「スポーツオノマトペ」の研究が参考になるだろう。吉川（2013）は、スポーツオノマトペは、通常の言葉では説明しにくい微妙な感覚印象やイメージを端的に言い表すことを可能にすることから、指導者がアスリートに運動学習に関する「コツ」の獲得や「感覚」的な理解を深めることを可能にすることを立証した。言葉（記号）が身体的感覚と結びつくことが言葉の意味感覚をより深く理解させるといふ好事例であろう。

2.2 言語発生、発達を促進（媒介）する装置としての「絵」と言葉の組み合わせ

本研究における活動が効果をもたらす根拠として挙げられるのが、多感覚を利用する効果である。言葉による表現が途上にあるこどもの学習・発達を支援するためには、多角的・多面的に外化された「資料」は多い方が良い。そのために効果的であるのが、例えば、クレス（2018）のマルチモダリティ理論や、やまだ（2018）のビジュアル・ナラティブ（VN）理論である。マルチモダリティ理論では、異なる表現媒体を組み合わせることで人はより複雑で深い表現力を発揮すると考える。また、言葉と視覚が連動して働く、すなわち「視覚イメージによって語ること、あるいは視覚イメージとことばによって語る」（同書, p.2）VN理論では、抽象的な記号・言葉がわかりやすい具体的なイメージを呼び起こすことによって「経験とむすびついた多様な生きたイメージとなり、新たなもの語りを生みやすくなる」（同書, p.3）という。こうした理論は、導入期の外国語学習においても、つまずきやすいアルファベット文字（綴り）と音の関係を

指導する際に用いられるフォニックスの指導法などでも活かされている。例えば、加藤ほか（2020）によれば、視覚的な絵を使って文字の形や音に関するお話を身体で表現するという多感覚的なフォニックスの指導方法は、学習者の記憶に残りやすく、結果として学習者の音韻認識を向上させるという知見を提示している。

2.3 言語発達における「二人称的」（社会文化論的）見方

第二言語獲得（SLA）研究は、元々母語獲得理論の応用から始まる。母語も第二言語（外国語）いずれも、言語学習・習得は従来、個人の脳の中で起こる言語認知体系の変化と捉えられてきた。この認知的視点による個に閉じられた学習理論へのアンチテーゼとして、1990年代後半より提示されてきたのが社会文化的な視点による発達理論である。社会文化理論（Lantolf, 2000ほか）による言語学習・発達観は、ヴィゴツキーの発達思想を源流とし、学習活動を個の単位ではなく、その場を構成する人、モノを含むすべての環境要因との関係において捉えようとする。中でもこどもが独力で解決できる「現在の発達水準」と、大人やより能力の高い仲間の助けを借りて解決することのできる「潜在的な発達水準」の差と説明される「発達の最近接領域（ZPD）」（ヴィゴツキー, 2001）は、こどもの心的発達のメカニズムを説明する重要な概念である。教育現場で考えると、こども（学習者）の学習・発達が発生する（促進される）か否かは、学習環境をデザインする立場にある教師のこどもとの関係の築き方、関わり方が鍵となる。

学習者と指導者の関係性のありようについて参考になるのが、佐伯（2017）の「二人称的かかわり」である。佐伯は、従来の発達心理学の研究が、「科学的」の名の下、研究対象者であるこどもとは直接の関係を持たない「傍観者」として「三人称的かかわり」をしてきた、と指摘する。佐伯によれば、学習・発達は、こどもと関係を持つ者が積極的にかかわろうとする「二人称的」すなわち「共感的なかかわり」なくしては起こり得ないと主張する。ここでいう「共感」とは、「自分自身を『からっぽ』にして、そっくり丸ごと、相手のなかに入ってしまうこと」「相手が見ているモノ・コトを、相手の立場と視点から見」る（同書, p.44）ことである。これに関連して、長年、乳児の言葉の発生を研究してきたやまだ（2010）は、主体（こども）が外界（他者を含む環境）と闘い、外界のものを個人の内に「取り込むこと（＝獲得）」を発達とみなす西洋的、二項対立的な言語獲得観を退け、教えるものと教わるものがともに共鳴し、共感し、響き合う「並ぶ」関係の間からおのずと言葉は生まれると主張する。

本研究では特に、絵と言葉の組み合わせに着目した。他者との間に言葉が発生するためには、「記号接地」が不可欠であり、さらに他者との「並んだ」関係性が必要であるとする「二人称的」（社会文化論的）枠組みから、言葉とは異なる規則をもつ絵に着目し、これらを組み合わせた表現活動の考察を通して、メタ言語意識の育成が目指される外国語教育における示唆を導きたい。本稿では、二つの実践事例を検討する。一つ目は、先行事例として、藤井ら（2022）による実践データを本研究の枠組みによって新たに検討するもの、もう一つは、先の実践を元に本研究の枠組みで実施した新しい実践事例である。

3. 実践事例の検討

3.1 アルファベット文字の形と音から得られた感覚を絵に描く活動

- 対象校と対象者：公立A小学校3年生 28名
- 実践時期：2018年12月18日（火）全2時間
- 活動デザインの背景と授業の展開：

この実践は、現行の指導要領改訂が告示され、中学年での外国語活動全面実施への移行期間に行われた。3年生はこの授業までに12時間の外国語活動を実施済み、その中で本実践に関連する内容はアルファベットの大文字の名前読み（例【A】 = 【ei】）は行っていたが、音読み（例【A】 = 【æ】）はこの授業で筆者の発音で初めて聞いた。なお、文字は国語のローマ字学習の時間に簡単に触れた程度である。

活動はまず、筆者がアルファベットの大文字を見せ、文字の名前をこどもと一緒に確認した後、それぞれの音を紹介した。その後、こどもは自分の好きな文字の一つを選び、選んだ文字の形と音から受けたイメージを画用紙に絵の具を使って表現した。作品制作中は、筆者を含め授業デザインに関わった指導者らは机間巡視を行った。最後に、こどもは

自分の作品に題目をつけ、有志による発表が行われた。

➤ 作品に見られるアルファベット文字の身体性



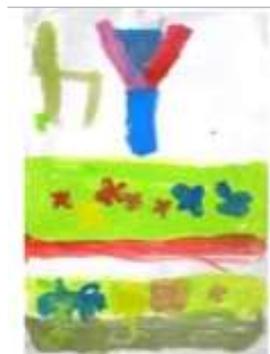
a児「はじける夢をみる」



b児「花畑」



c児「おんぷがでてるっぽう」



d児「ながめるおはな」

a児が選んだ文字はT、b児はK、c児はL、そしてd児はYからインスピレーションを得て描いた作品である。音象徴的に言えば、TやKは阻害音からくる角ばっていて硬いイメージ、またLやYは共鳴音の柔らかいイメージであるが、こどもが感じた心象は必ずしもこの法則通りではないようだ。例えば、a児のTはゴツゴツした硬さよりも軽やかに跳ねるイメージを表現しているし、b児の作品は、硬いイメージというよりむしろ優しく柔らかなイメージである。こうしたイメージの齟齬については、後述の考察の部分で議論する。ここでは、普遍性を示す点として、a児のTとb児のKには、どちらも有声音が持つ長い音ではなく、無声音の短く鋭い、跳ねる感覚がみて取れることを強調しておきたい。全体として、a児の山吹色とカラフルな色調やb児の筆の払いや小さな点の集合体を通して、作者が感じている躍動感や幸福感といった複雑な感覚が伝わってくる。

音から感じたイメージを全体的に捉えて表現したa児とb児に比べると、c児とd児の作品は音よりも文字の形からの印象（見立て）が強い。しかし、見立てから出発したc児は最初、鉄砲の持ち手が重厚な黒い色調だったが、筆者が通るかかり、Lの音をc児と共に確認することにより、鉄砲から音符が飛び出し、色調も緑に変化したことから、音がc児の文字のイメージに影響を与えたことがわかる。また、d児の作品は、本人の意識の中でYの音の影響がどれほどあったかは定かではないが、全体としては確かに柔らかなイメージでまとまっている。これらの絵の題目から見取れることは、こどもらはこの活動を楽しみながら、文字の音と形から得た自分自身の多様な感覚（身体性）を調整し、一つの全体として外化しようとしているということである。

3.2 好きな動物と動物が出す音を絵に描く活動

- **対象校と対象者**：公立B小学校1年生（2クラス） 全60名
- **実践時期**：2023年10月28日（土）全2時間
- **活動デザインの背景と授業の展開**：

現行の学習指導要領が提示されてからは、外国語活動が始まる3年生を待たず、外国語活動の時間を設けている学校も多い。この学校でも1年生から、自治体事業で計画されたモジュール授業（1回15分×週3回）を実施している。既習事項は、アルファベットの歌、アルファベット文字と音、あいさつ、日常場面の簡単な基本表現などである。ただし、本活動は図画工作科の授業として行なった。

活動はまず、多色の色鉛筆の腹を使って背景を塗り、その上にこどもたちがあらかじめ決めておいた動物の写真を元に色鉛筆での下地にクレヨンで絵を描く。絵が完成したら動物が出す音を文字で表現して書く。

授業はゲスト指導者（フランス語母語話者の画家）が英語で活動の手順とポイントを説明し、日本人アシスタントが適宜日本語で補足説明を行った。さらに指導者は、動物が出す音を、一般的な鳴き声（例えば、犬はワンワン、ネコはニャーニャーなど）ではなく、自分が描いた動物の様子をよく観察し、想像的かつ創造的に表現するよう例を示しながら伝えた。作品制作中は、筆者を含めスタッフと見学者がこどもと対話しながらプロセスを見取り、必要に応じて支援

を行った。最後に全ての作品を貼り出し、有志によって作品の意図や気づきが共有された。

▶ 作品に見られる言語の身体性

三匹のワニを描いたe児は、見学の院生に、真ん中に描いた小さいワニには虫歯があって噛めないため音が異なると力説したという。上と下のワニにはどちらも立派な歯があり、大きい音をイメージさせる濁音（「ガチ（ン）」）だが、オレンジワニは弱そうな「かち」という清音である。e児によるとひらがな「か」とカタカナ「チ」を意図的に混在さ



ワニを描いたe児



クジャクを描いたf児

せているということであったが、この児童はひらがな表記を通して、脆弱な感覚を表現しようとしたのかもしれない。f児は、羽根を目一杯広げたクジャクが「うわ うわ」と雄叫びを上げている。「しゃしゃ」はおそらく羽根を広げる瞬間の音と思われる。口をつぼめた「う」から口を大きく開ける「わ」は羽根を一気に広げた時の感動的なインパクトを表現した独自の表現である。



イヌを描いたg児



ヤギを描いたh児

犬を描いたg児は、タブレットで犬の鳴き声を検索していた。そこで出てきたアルファベット表記のBow wowの文字を犬の周りに鳴き声のようにデザインしている。歯を剥き出した表情や動きのある脚から活発な様子が出ているが、そこに鳴き声を意味する文字表記の中で、角ばったwの形が顔の周りに最も多く描かれていることでこの犬の騒々しさが一層引き立てられている。

h児が描いたのはヤギである。h児がヤギを描いた理由は「見たことがないから」だそうで、周りの文字はこのヤギが何かを食べている時の音（「アム アムアエー、テーポ、ツポリ、ポリ」）だという。絵をよく見るとヤギの一方の頬が膨らんでいるのがわかる。書かれた文字の音は検索した情報ではなく、自分で想像した音らしい。h児のヤギが食べる音は、h児が発声した音を支援員が聞き取ってカタカナで表記したメモ書きを写したものである。

4. 言語発生に至るプロセスの考察と教育的示唆

ここでは、上述した2つの事例で起こったことを、2章で示した理論的枠組みに沿って考察するとともに、そこから得られる教育的示唆を整理したい。

4.1 言語の身体性とヒトの感覚に見られる普遍的特質に着目する視点から

今井らの研究が示す通り、音象徴には言語に関わらず普遍性があることがわかっている。事例1の結果からも、紹介したこどもの母語はいずれも日本語であるが、TやKには「はじける」ような、短く小さいイメージ、LやYには優しく柔らかなイメージがそれぞれの絵に表出していることから、音という聴覚からのイメージに一定の共通した感覚があることがわかる。またf児の「う」から「あ」へと移行する音は、畳んだ羽根の静寂なイメージから、羽根を広げた時の大きく優雅なイメージを的確に表現しており、普遍的な音感覚として共有され得るだろう。

ここで、a児のTやb児のKについて、いずれも今井らが示した阻害音が放つ「角張っていて硬い響き」とは少し異なるイメージが感じられる理由について議論を深めたい。a児のTやb児のKの音の感覚には共通性が認められるが、双方の題目『はじけるゆめをみる』や『花畑』からは角ばった硬いイメージというよりむしろ軽やかで柔らかなイメージが感じられる。この語に含蓄されるイメージの齟齬について筆者は、ヴィゴツキー(1978)の語の意味に関する議論を想起する。ヴィゴツキーは辞書的な語の意味(meaning)と個人的な体験から感じる語の感覚(sense)を区別している。例えば、「犬」という語の辞書的な意味は、人が飼いつづけた哺乳動物で多くの種類がある、といった定義だが、その感覚は、それぞれの人の体験(例えば、犬を家族として飼っている人と動物嫌いで犬に噛まれた経験がある人など)によって全く異なる。犬が家族の一員と思う人にとって「犬」という語の感覚は「愛」であり「癒し」であるかもしれないが、犬嫌いの人にとっては「恐怖」であり「嫌悪感」でしかないかもしれない。事例1では、こどもが選んだ文字は自分や兄弟姉妹の名前に含まれる文字が多かった。たかが一つの文字であるが、それぞれが選んだ文字に対する感覚には、それぞれのこどもの生活体験から造られた個人的な感覚やイメージが埋め込まれていると考えられるのではないだろうか。このことから、音の粒は語よりも小さいが、文字レベルの音からも語と同様、個人的な感覚の違いが表出するのではないかと推察される。a児が感じたTの感覚とb児が感じたKの感覚は無声音が持つ一定の共通項を有しながらも、双方の題目から感じさせる阻害音のイメージから遠い印象は、個別の体験から生じるそれぞれの文字への愛着からくるのかもしれない。

4.2 言語発生、発達を促進(媒介)する装置として「絵」と言葉を組み合わせる視点から

音象徴をめぐる議論は、文字や言語の音のみに注目する。しかし、文字をもつ言語の場合、音とは別に、あるいは音と相まって、人は文字の形から視覚的な感覚を得る。日本語にはひらがな、カタカナ、漢字、アルファベット、数字などのハイブリッドな文字の種類があり、文字表記の違いによって異なる印象を伝える。例えば、同じ音を持つ言葉でも、ひらがなはカタカナ表記よりも柔和なイメージを与える。事例2のe児は作品の中で、ひらがな「か」が、カタカナ「ガ」より弱々しく脆い感覚であることを意識的に表現しようとしている。g児の作品では、犬の鳴き声は、wの音よりもゴツゴツ尖った形の視覚イメージとその文字が犬の周囲に配置された様によってその騒がしさがより効果的に表現されている。これは、異なる媒体(モード)を組み合わせることで作者の意図がより深く表現されるとするマルチモダリティ理論の法則をよく表している。こどもたちはまさに「ビジュアル」によって「語っている」(やまだ, 2018)のである。このことから示唆されるのは、アルファベット文字と出会う導入期の外国語活動の指導においては、文字には音と形があること、そしてこどもは音とともに形からも普遍的あるいは個人的なイメージを受け取っているということに十分配慮すべきであるということである。c児の絵の変容からわかるように、音と形のイメージは必ずしも一致しないかもしれないため、こどもの内面では混乱が生じているかもしれないし、意識化さえできていないのかもしれない。言葉や文字の身体性を絵にする活動は、そうしたこどもの未だ言葉にならない心象(イメージ)を外化させ、情報として視覚化する。

重要なポイントは、この活動では教師が「正解」を持っていないことである。作品に求められているのはこども一人一人の感覚を絵に表現することであり、個々の生活背景によって表わすイメージは違って良い。外国語の文字学習では、文字の形と音を繰り返し反復させ、4線の正しい位置に「書き写す」活動が待っている。また、語の意味や文単位

の表現においても、辞書の定義や教科書に示された用法が「正解」とされる活動に終始している。言葉の身体性に着目しつつ、「正解」を求めることなく絵にする活動は、やがてはこども自身が主体となって言葉への関心を深め、メタ言語意識の目覚めにつながるのではないだろうか。

4.3 言語発達における「二人称的」（社会文化論的）視点から

最後の視点は、こうした活動の効果を活かす鍵を握るこどもと指導者の関係性のありようである。先述の通り、言語の身体性を絵にする活動が効果を発揮する理由は、教師とこどもの関係性を通常の「教える」－「教えられる」関係から解放させる点にある。教師はこの活動の中では、知識を与える「教える」人という存在から、インフォーマントとしてのこどもから「教わる」関係に逆転する。こうしたフラットな関係性、すなわち、やまだのいう「並んだ」関係が、言語教育では常に「答え」を知っている教師の優越性を無効にし、こどもが見ている世界を、こどもの立場・視点から「二人称的」（佐伯, 2017）にかかわる場面を造り出す。それによって、こどもの「ナラティブ（語り）」（やまだ, 2019b）が発生するのである。

言葉による「ナラティブ（語り）」は個人の「経験を編集」（同書, p.5）する。やまだは、言葉と視覚イメージが連動するVNは、人と人が向き合う二項対立の関係から、人と人が並んで共に同じものを見る共存的な三項関係へと関係の質を変革する（同書, p.6）と主張する。教師がこどもと「並んだ」関係で目の前のVNを成立させようとする時、こどもはようやく権威の抑圧から脱することができる。「『私』とは、認知と情動が一体となった複合体」（やまだ, 2019b, p.8）という捉え方はヴィゴツキーの思想にも通じるものである。こどもの心が解放され、自分で見聞きした体験を共感してくれる他者に見せたい、伝えたいという情動が発動する時、他者とのあいだに新しい言葉が発生するのである。h児が「見たことのない」動物が食する音の表記は、まさにh児とh児の脳裏に浮かぶ音の感覚に共鳴し、共有しようと粘り強く「並んで」聞き取った支援員との協働の成果であろう。その結果、「見たことのない」ヤギの、複雑で未知なる音の世界は、他者の寄り添いを通して世に出ることを可能にした。「アム アムアエー、テーポ、ツポリ、ポリ」は、興味深い独自の感覚的表現である。

5. まとめにかえて

以上の考察から外国語教育における教育的示唆をまとめてみよう。

➤ 原則英語とされる日本の学校における外国語教育では、英語の言語規則や基本表現を「定着」させることが目標とされている。しかし、言語教育の目的を人間の心的発達とするならば、メタ言語意識の向上による自律的な学習が目指されるべきである。そのためには文構造や語のみならず、文字レベルにおいても個人的な感覚あるいは身体性を意識した体験的な活動が求められよう。

➤ こどもの言語知識や技術に限られている初等外国語の活動では、視覚イメージや非言語を利用することが推奨されている。これらは言語による表現を「補完」するのではない。絵は、言語の音と形からのイメージを同時に一つの全体として表現する、言葉と「ともに」作者の意図をより深く表現し得る複合媒体である。文字の形や音からの異なる感覚を調整することがメタ言語意識の向上につながる。

➤ 学校教育において、「正解」がない活動は特に重要である。常に「正解」を握る教師がその優越性を無効化し、聞き役となる「二人称的」なかかわりによって、こどもの情動が解放され、こどもの「ナラティブ（語り）」が共感的に聞かれる中で、言葉は生まれる。言い換えれば、言葉に「ついで」の関心は教師とこどもの「並んだ」関係からしか生まれない。以上のように、本研究の絵と言葉を組み合わせさせた実践は学習初期の外国語教育に重要な示唆を与えてくれた。

「内実のある意味」（やまだ, 2019a, p.5）は、言語の身体性（感覚）に十分に浸りながら感じ取るところに生まれる。時として意味は即座には言葉では表現できない。そのため外国語の活動は表面的で単純なルーティンになりがちである。しかしながら、本研究の事例から見たのは、外国語の知識量の少ない幼年期のこどもであっても、言葉にならない個人的な感覚は、視覚イメージと組み合わせられることで伝達され得るメッセージとなることである。一方で、我々は、全てのこどもが心象のイメージを絵で表現することを得意とするわけではないことを認識しておく必要がある。例えば、アファンタジアと呼ばれる特質を持つ人は、脳内に物事の心的イメージを持つことが困難と言われる。この特質はまだ

研究途中でわからない部分も多く、当事者でさえ認識できていないことが多い。本研究では、2つの事例の考察にとどまったが、今後は音楽などの聴覚イメージやその他の領域との組み合わせ活動がメタ言語意識の向上とどのような関連があるのかについて探究し、新たな報告の機会を持ちたい。

謝辞

本研究は、科学研究費助成事業、基礎研究（C）課題番号 19K00760の助成を受けている。なお、両事例校には研究目的のデータ公表について許可を得ている。ご協力に感謝したい。

引用文献

- 今井むつみ・秋田喜美. (2023). 『言語の本質 ことばはどう生まれ、進化したか』中央新書
- 加藤茂夫・入山満恵子・山下桂世子・渡邊さくら (2020). 「ジョリーフォニックス指導効果検証の試み—新潟県南魚沼市の取り組みから—」『小学校英語教育学会誌』20巻01号. 272-287.
- ギンター・R・クレス. (2018). 『マルチモダリティ—今日のコミュニケーションにせまる社会記号論の試み—』溪水社.
- 佐伯胖. (2017). 『「子どもがケアする世界」をケアする 保育における「二人称的アプローチ」入門』ミネルヴァ書房.
- ヴィゴツキー. (2001). 『新訳版・思考と言語』柴田義松（訳）新読書社.
- 福田浩子. (2007). 「複言語主義における言語意識教育—イギリスの言語意識運動の新たな可能性」『異文化コミュニケーション研究』第19号. 101-119.
- 藤井康子・岩坂泰子・樋口和美・水城久美子. (2022). 「図画工作と外国語活動の融合型授業の開発と実践の考察—アルファベット文字の形と音から主題を生み出す絵に表す表現—」『美術科教育学会誌』第43号. 173-188.
- 文部科学省. (2016). 「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377098.pdf
(2023年12月17日閲覧)
- やまだようこ. (2018). 「ビジュアル・ナラティブとは何か」『N: ナラティブとケア第9号 ビジュアル・ナラティブ：視覚イメージで語る』遠見書房. 2-10. やまだようこ. (2019a). 『ことばのはじまり（やまだようこ著作集 第2巻）意味と表象』新曜社.
- やまだようこ. (2019b). 『ものがたりの発生（やまだようこ著作集 第3巻）私のめばえ』新曜社.
- 吉川政夫. (2013). 「運動のコツを伝えるスポーツオノマトペ」『バイオメカニズム学会誌』37巻4号. 215-220.
Association for Language Awareness. https://www.languageawareness.org/?page_id=48
(2023年12月17日閲覧)
- Council de l'Europe, (2001). 『ヨーロッパ言語共通参照枠』
<https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages/plurilingualism-and-pluriculturalism>
(2023年12月17日閲覧)
- Harnad, S. (1990). The symbol grounding problem. *Physica D: Nonlinear Phenomena*, 42 (pp.335-346).
- Lantolf, J. P. (2000). Introducing sociocultural theory. In J.P.Lantolf (Ed.), *Sociocultural theory and second language learning* (pp.1-26). Oxford University Press.
- Vygotsky, L.S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes* (M.Cole, V.John-Steiner, S. Scribner & E. Souberman, Eds.). Harvard University Press.

アクティブ・ラーニングの促進とグローバルな視野の育成

Empowering Active Learning and Fostering a Global Perspective

ドミニク・ルトランジェ アーティスト **Dominique Lutringer, Artist**

私は創造力と創作活動の力を信じ、アーティストとして、自分の時間と芸術への情熱を子どもたちと分かち合うことを大切にしています。日本で10年以上にわたり、アートのスペシャリストとして国際バカロレアのPYP、MYP、DPプログラムのアート指導に携わった経験から、アクティブ・ラーニングの意義を再認識しています。この教育アプローチでは、学習者が教師から受け身で知識を吸収する代わりに、自分の教育経験を自ら設計する能動的な参加者になります。子どもたちが主体となって問いを立て、探究し、世界と積極的に関わることを奨励するアプローチです。

この枠組みの中で、美術教育は重要な役割を担っています。ビジュアルアートのプロジェクト型学習は、子どもたちに想像力を働かせ、実験し、選択し、自分のアイデアを実現する機会を提供します。この目的は、アーティストを養成することではなく、子どもたちが創造的に考え、問題を解決し、自己を表現する能力を身につけることです。

この冊子は、教室にビジュアルアートを取り入れ、子どもたちが学習プロセスに積極的に参加できるようにするためのヒントを提供します。学習は教科を超えて相互に関連する探究の旅です。ビジュアルアートを取り入れた実践的なプランや魅力あるプロジェクトを通じて、子どもたちが楽しく能動的に学び、世界をより深く理解する手助けになる方法を共に探究していきましょう。

As an artist, I am committed to the power of creativity and the act of creation, and I value the opportunity to share my time and artistic passion with children. In my role as a specialist art teacher, I have been engaged in teaching the art components of the International Baccalaureate's PYP, MYP, and DP in Japan for over a decade. This experience has reinforced my belief in the importance of active learning. This pedagogical approach moves away from the traditional model of students passively receiving knowledge from teachers, towards a model where students actively participate in shaping their own educational journeys. They are encouraged to inquire, explore, create, and critically engage with the world around them.

In this context, art education assumes a critical role. Visual art projects offer students opportunities to imagine, experiment, choose, and actualize their ideas. The objective is not to turn every student into a professional artist, but rather to empower them to think creatively, solve problems, and express themselves.

This booklet will provide insights into integrating visual arts into your classroom, enabling your students to engage actively in their learning process. Education transcends specific subjects; it is an interconnected journey of discovery. Together, let's explore how practical plans and engaging projects that incorporate visual arts can aid children in learning joyfully and actively, enhancing their understanding of the world.



生きる力をはぐくむ「英語でアート」ワークショップ

Cultivating the Vitality to Live through 'Art in English' Workshops

「英語でアート」チーム 'Art in English' team

【ワークショップ概要】

「英語でアート」は、国際バカロレア教育の指導経験があるアーティストのドミニク・ルトランジェ、英語活動に従事してきた元教員や英語教師らで企画運営している。

本物のアーティストに出会い、英語をコミュニケーションのツールの一つとして、創造的なアート作品づくりに取り組んでいる。新指導要領のねらいに基づき、教科横断型のワークショップを提案、実施する。ワークショップ実施後には、児童と共に活動全般について、また作品について振り返りを行い、児童のアンケートから成果と課題をまとめ、学校にフィードバックする。完成した全児童の作品を組み合わせ、アーティストとスタッフがアレンジしたものを校内に展示して、全校児童や地域の方々と共有する。

【ワークショップのねらいと効果】

2020年より2年間の試行期間を経て、本格実施となった学習指導要領の大きな目標に「社会の変化に対応できる『生きる力』をはぐくむ。」と表記されている。また、「個別最適な学び」と「協働的な学び」について述べている。「生きる力」を学校で学んだことが将来につながるとし、「個別最適な学び」を「個性を生かし、児童の可能性を引き出す」こと。「協働的な学び」を「多様な個性を最大限に引き出す」こと。とした上で、「主体的対話的で深い学び」の実現に向け取組を進める。と表されている。また、各教科で得た知識を生かし学ぶことや自ら考え対話しながら学ぶアクティブラーニングの学びの重要性についても挙げられている。このような指導要領の内容から見ても、「英語でアート」の活動は、まさに教科横断型、アクティブラーニングの一例となっているのではないだろうか。

これまでの教育や社会は均質化を求めてきたが、これからは、多様な価値観の人々と協力し個々の創造性を広げていくことが求められている。フランス人アーティストと出会い、普段と違った環境で自分と違う物の見方や考え方にふれ、言語がよくわからなくても理解しよう、伝えようとする異文化コミュニケーションを実際に体験することによって、価値観の多様性を肌で感じ、曖昧さへの耐性を養い、英語学習へのモチベーションを高めることができる。

アート制作にあたっては、正解もまちがいない課題に挑戦し、時間管理や技法などを頭に置きつつ、思い切り創造力を広げ、それぞれの個性を発揮して作品づくりを楽しんでいく。「英語でアート」で取り組んだ新しい経験の中で、自分が生み出した作品に満足感を得ることは「自分はこんなこともできるんだ」という創造的な自信をもつことにつながっていく。また、全児童の作品を一つにした協働作品を鑑賞し、みんなで振り返ることによって、それぞれに個性がありそれぞれに大事である人間の多様性を可視化することができる。自分と友だちの長所や共通点を見つけ、自他の相互理解にも役立つに違いない。

わたしたちは、こうした表現活動を通して、見る人々の心に何かを訴えたり、感動を与えたり、心の変化をもたらすのがアートであるととらえ、活動を進めている。社会の情報化が進んでもコミュニティとのつながりは大切である。児童の作品を地域の方々に公開することで、子どもたちが自身をコミュニティの重要な一部と認識して、より積極的に地域社会に関わっていこうという意欲を高めることを目指している。

【「英語でアート」におけるアートと外国語の目標】

「英語でアート」における「アート」活動とは、単に美的な創作物を生み出す行為にとどまらず、個人の内面的な世界と外部の環境との相互作用を通じて、総合的な学習と成長を促すものである。

創造性：アートは個人の創造性、想像力、思考を反映する。子どもは独自のアイディアや考え方をアート作品を通じて表現する。また、身体的な感覚を働かせて造形する楽しさを体験する。

表現とコミュニケーション：アートは感情、思考、経験を表現する手段である。子どもたちはアートを通じて自己表現を深め、他者とのコミュニケーションを図る。

教科横断型学習：アートは他の教科や分野と結びつき、より広範な知識とスキルを統合する。英語でのコミュニケーション、社会や自然、数学との関わりなどが含まれる。

文化的・社会的な関わり：アートは文化的、社会的な文脈に根ざしている。子どもたちは自分たちの作品を通じて、地域社会や文化とより深く関わることができる。

技術と知識：基礎的な芸術技術や、異なる材料やメディアを使用する知識もアートの一部である。子どもたちはこれらのスキルを学び、実践する。

ふりかえり：アートを通じて、子どもたちは自分の作品やプロセスをふりかえり、言語化する。自己評価や他者からのフィードバックを含む。

【学習指導要領における図画工作と外国語の目標】

図画工作

表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成する。

外国語

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する。

【ワークショップ実施校】

2019年度

富雄第三小中学校（奈良）＊佐保小学校 夏季教員研修 昭和女子大学附属昭和小学校（東京）

2021年度

左京小学校（奈良）六条小学校（奈良）

2022年度

曾爾小中学校（奈良）東市小学校（奈良）佐保小学校（奈良）上牧小学校・上牧第二小学校・上牧第三小学校（奈良）

保見中学校（愛知）左京小学校（奈良）椿井小学校（奈良）同志社国際学院初等部（京都）

2023年度

東市小学校（奈良）済美小学校（奈良）左京小学校（奈良）大安寺西小学校（奈良）椿井小学校（奈良）

奈良北高等学校（奈良）わかば高等学校（大阪）同志社女子大学（京都）

1年生

ことば：
生きものたちが出す音

大すきな生きもの Favorite creatures

1年生プラン

わたしたちが住んでいる地球にはたくさんの動物や生き物が住んでいる。どんな生き物の命も大事であり、共生しようとする考えを低学年からはぐくむことは大切であると考えます。1年生の児童は初めての小学校生活の中で、校舎内や校庭、広いグラウンドで様々な物を発見し、興味を示していく。特に生活科の学習では、季節ごとに校庭や近くの公園に出かけ「春みつけ」などの活動を通して、たくさんの生きものを見つけ、見つけたものを先生や友だちに伝えようとする。文章表現がまだまだ未熟な児童にとって、絵でそれらを表現できることは有効な手段である。今回のプランは、こうした児童の気持ちを大切にしながら、それぞれのイメージを膨らませ、好きな色や形を選び、好きな生きものを自由に生き生きと表現することを目標としている。

児童らは、オールイングリッシュの活動の中で、言葉の意味は分からなくても身振りや手ぶり、提示されたカラフルな生き物の作品を見て、自分はどのように表現しようかと考えながら、でき上がっていく喜びを実感することができる。

また、授業の最後の「ふりかえり」の中で、自分の描いた作品に満足すると共に友達の作品の良さにも気づき、自己肯定感や達成感を高めることができると考えている。

学習目標

- ・身近な材料を使いこなし、好きな形、色を使って作品を作り出す喜びを味わう。
- ・体全体の感覚を働かせて造形する楽しさを体験する。
- ・「生きもの」を観察し、その特徴を捉える。





つながる教科

生活科
外国語活動



画材

四つ切り画用紙
クレパス、色鉛筆



技法

ドローイング
カラーリング
アウトラインング
レタリング



SDGs

陸上資源・陸の
豊かさを守ろう



学際的なテーマ

この地球を共有すること
Sharing the planet



KEY WORD

活動中に子どもたちが耳にする主な英単語のリスト

これらの言葉を前もって子どもたちに紹介しておくこと
より自信をもって活動する手助けになるでしょう。

Technique 技法、テクニック

drawing 描くこと coloring 色づけ outlining 縁取りを描くこと lettering レタリング

Elements of Art 美術の要素

line 線 color 色

Materials 用具、材料

paper 紙 oil pastel クレパス colored pencil 色鉛筆



Other art terms その他の用語

animal 動物 insect 昆虫 sound 音 make a sound 音を出す posture 姿勢、ポーズ
black 黒 white 白 red 赤 yellow 黄色 blue 青 orange オレンジ色 green 緑色
purple 紫色 pink ピンク outline 輪郭 draft 下書き letter 文字

題材について

低学年の児童は、生きものが大好きで、興味深く観察したり触ったりする。国語科の単元に登場する「生きもの」の挿絵や画像を見て、その鳴き声や足音など、その「生きもの」が出す音や特徴を瞬時に捉え、声に出したり絵に表したりしようとする。生活科の学習や校外学習で出会う「生きもの」に対しても同様である。本題材は、このような児童の実態を踏まえ、各自が描きたい「生きもの」がどのような音を出すのか考え、その動物の表情や動作のイメージを膨らませながら、作品作りに取り組んでいく。

児童は、思いのままに生きものが出す音を作品に書き入れていくことによって、描いた「生きもの」に表情や動きが加わり、より生き生きとした作品になると考える。

活動の流れ

● 学習活動	◆ 指導上の留意点
1) 外国語で簡単な挨拶をする	ーフランス語や英語で簡単なあいさつを試してみる
2) テーマについて対話しながら学ぶ アートのキーワードを知る 色と模様の説明を聞く 生き物の動き・鳴き声・音を意識する	ーさまざまな動物の画像やカラフルな絵を見せ、創作の意欲を高める ーアーティストの作品を鑑賞し、独自の見方や考え方に触れさせる ー関連する英語を対話形式で発音、指でなぞる等、身体的な感覚を使って学ばせる ー簡単にユーモラスなイラストを描きながら、動物の動きや音のアイデアを示す
3) 描き方について学ぶ	ー画像を見せながら大まかな創作の手順や技法を理解させる
4) 講師のデモンストレーション	ー対話しながら実際に描いてみせる
5) 児童が活動を開始する a 色鉛筆で背景を描く	ー鉛筆を寝かせて薄く色を重ね、広い範囲に塗る技術を教える
b 鉛筆で下書きをする	ー適度な大きさと描くよう助言する ー時間をかけない・細かく描きこまないよう指示し、下書きの意味を理解させる
c クレパスで生きものを描く	ーあらかじめ決めておいた生きものを自由にのびのびと描かせる
d 黒クレパスで縁取りをする	ー黒を最後に使う意味と効果を実感することで理解させる
e 黒クレパスで生き物が出す音を書く	ー子どもから自然に出てくる音を作品に生かすよう勇気づける
6) 後片付けとふりかえり	ー自分の使ったものを片付け、汚したものを掃除させる ーみんなの作品をボードに貼り、みんなで一緒に振り返りをする ー自分や友達の作品を見て改善点、次回の課題を見つけるよう促す ー作品の制作過程に工夫やアイデアなどが込められていることに気づかせる ー思い通りに表現できた楽しさを感じさせる

実際の活動

子どもたちの興味をひくようなデモンストレーション、単語レベルからの実践的な英語、対等に接して勇気付け、いいところを見出したら褒める、決められたルールや限られた時間の中で自律的に、対話的に、楽しく活動できるよう配慮する。

1. 簡単なあいさつをする / アイスブレイク



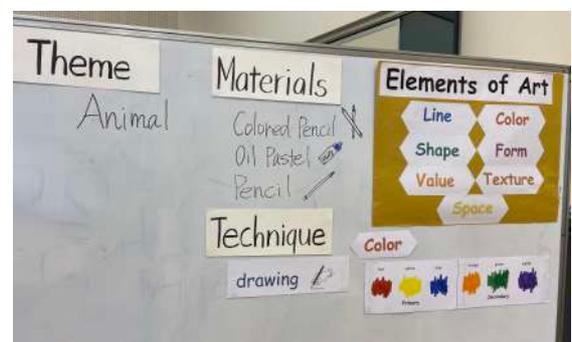
講師は、英語にフランス語や日本語もまじえてあいさつする。
ユーモアいっぱい子どもたちと対話し、距離を縮める。

日本人スタッフも英語で自己紹介する。
フレンドリーな雰囲気をつくり、子どもたちに英語の発話を促す。



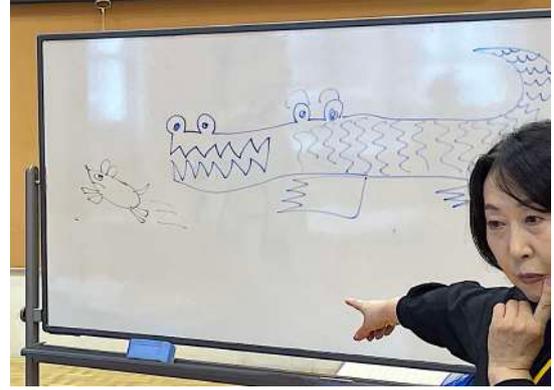
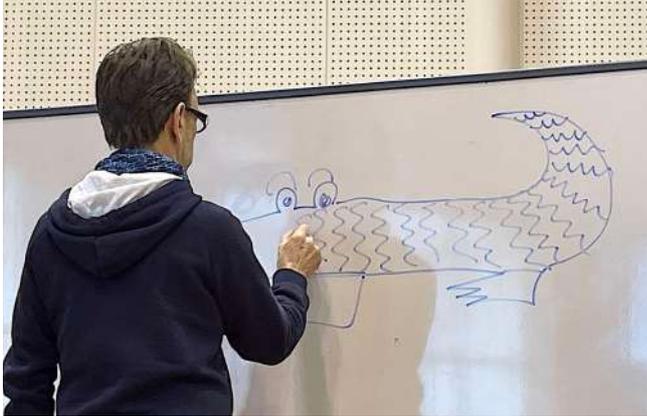
スタッフ
My name is Emi. Nice to meet you.

子どもたち
Nice to meet you too.



使用する画材、技法、アートの要素に関する簡単な英単語を、活動中の子どもの目に触れるように掲示する。
子どもたちに描きたい動物を考えさせたり、活動中に使用する英単語（p.17参照）に触れさせたり、前もって準備をしておく、より自信をもって、活動を楽しむ手助けになる。

2. テーマについて対話しながら学ぶ



講師がホワイトボードにワニの絵を描き、
続いてネズミの絵を描く。

「このネズミはどんな音や声を出すかな。」
講師の英語に続いて、アシスタントが日本語で子どもたちに問いかける。



カタカナ
書けるよ

ホワイトボードに
書いてみて

ひらがな
でもいい?

がんばれ

生きものの種類や状況によって出す音や声はさまざま。
子どもたちは、講師の口真似をしたり、思いついた声や音に口にしたり、アクティブに活動に参加する。

自分の経験や知識に想像力をプラスして、友だちと対話しながら、生き物たちが出す音についてアイデアを出す。



ワニから逃げてから
きゃきゃー

うん。
ネズミの声はチュウ
だけじゃないよね。

指名された子どもたちが前に出て、講師の描いたネズミやワニに音をつける。英語でもカタカナやひらがなでもOK。

子どもたちは、講師や友だちのアイデアも参考にしながら、動物の様子やそれが出す音や声について自分なりのイメージをふくらませ、自ら表現したい、創造したいという意欲をもつ。



3. 描き方について学ぶ

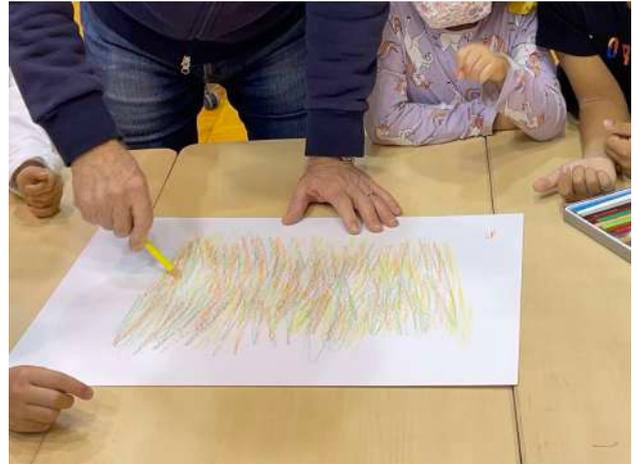


同じ年齢の子どもたちが描いた作品を見る。色の名前や動物の名前などの英単語を講師と対話しながら実践的に学ぶ。

講師のプレゼンテーションによって創作の手順と技法を大まかに理解する。

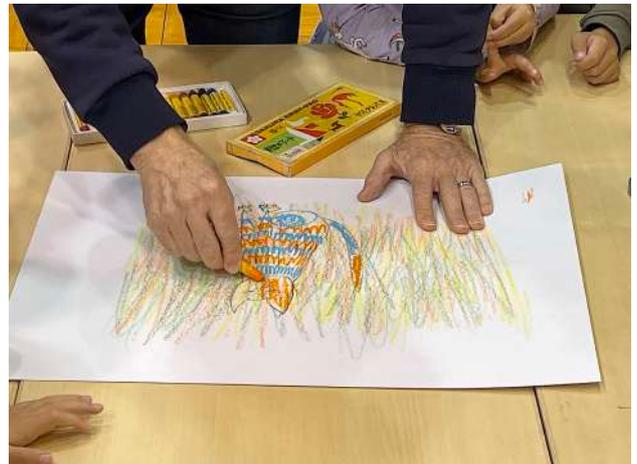
講師はすべて英語で話し、アシスタントが日本語で説明する。

4. 講師のデモンストレーション



デモンストレーション 1) 背景を描く。

色えんぴつを寝かせて持ち、広い範囲にうすく塗る。色を変えて同じように線を重ねることで色面を作る。



2) えんぴつで下書きをする

クレパスで塗ることを考え、鉛筆でシンプルに下書きする。

3) クレパスで生きものを描く

クレパスで好きな色をつかって自由に生きものを描く。



4) 黒クレパスで縁取りをする

さいごに黒のクレパスを使う。動物の目や鼻など黒く塗りたい部分や、鉛筆で下書きした線を黒で縁取る。

5) 黒クレパスで生きものが出している音を書く

自分の描いた生きものが出す音や声を想像し、型にはまった表現にとらわれず、自分の頭で考えた文字を、黒クレパスでアートの一要素として書き入れる。

5. 児童の活動 a 色鉛筆で背景を描く



背景 色鉛筆を寝かせて画用紙の広い範囲に色を塗る。自分の好きな色や同系色、すべての色を使う子ども、これから描く動物に合わせて「草原」や「海」といったイメージを持って描く子もいた。

ストロークに規則性をもたせたり、色を混ぜて自分の色を作ったり、抽象的な表現を楽しむ様子が見られた。

他の子どもと対話しながら、アイデアを得たり、ちがうスタイルを試したり、色を合わせたりしていた。



b. えんぴつで下書きをする

背景の上から鉛筆で描く。子どもたちはクレパスが淡い色鉛筆の背景を隠すことを理解している。クレパスで描くための下書きなので、あまり細かく描きこまないように助言する。



c. クレパスで生きものを描く



d. 黒クレパスで縁取りをする



e. 黒クレパスで生き物が出す音を書く



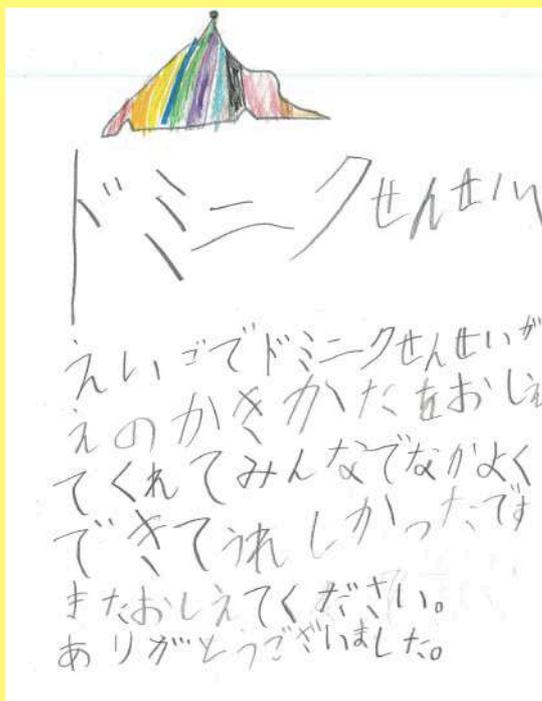
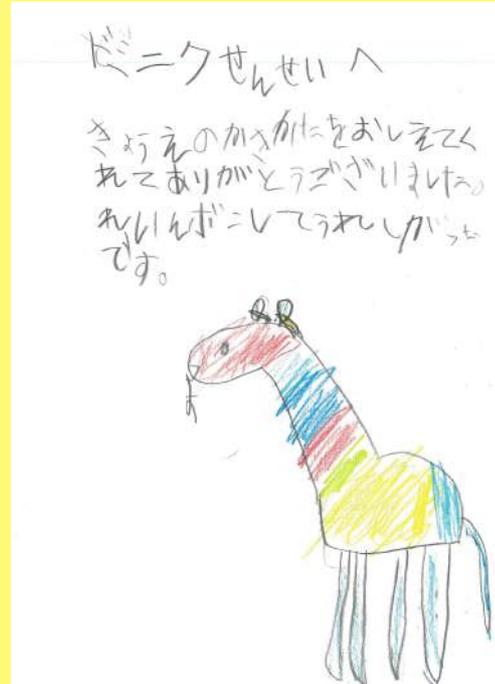
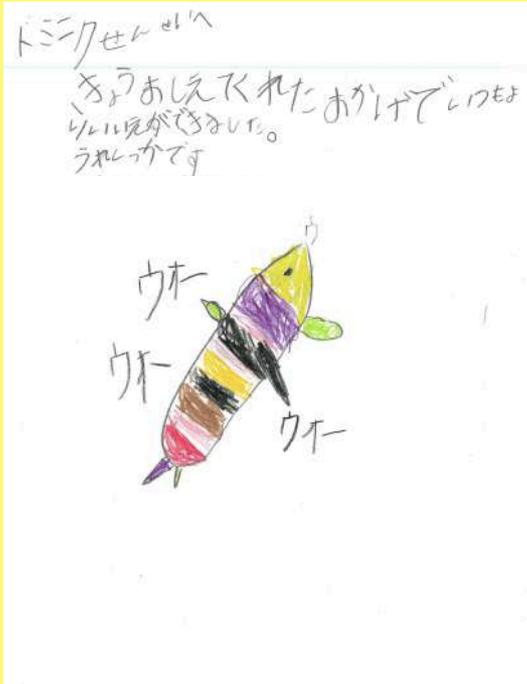
6. ふりかえり



こんなのできた！



1年生
リフレクション



成果と課題

今回初めて、絵の中に言語を入れるという活動を行った。1年生の児童は何の抵抗もなく自分たちが描いたお気に入りの生きものがどのような音を出しているのか考えていた。

あるキリンを描いた児童が「キリンって声を出して鳴く？」と友達に話しかけると、「鳴くよ。」「モー！って鳴くよ。」・・・などといった会話があった。児童は、概念にとらわれず、生きものの鳴き声や動作から出る音を考え、それぞれが素直に感じたままを音として絵の中に書いていった。

担任の先生は、前もって自分の描きたい生きものを考えさせ、その画像を一人ひとりのタブレットに入れさせワークショップに参加してくれた。また、それぞれの生きものが出す音を考えていた児童も多かった。そうした事前学習があることによって、児童はより意欲的に興味を持って取り組んでいたように思う。低学年の児童は教師の働きかけひとつで、その取り組みの様子が違ってくるのである。

事後の振り返りシートの裏には、全員の児童が、自分の描いた生きものの絵と共に講師へのお礼の手紙が添えられていた。

担任はこのワークショップの機会をとらえ、お礼のお手紙の書き方を指導したに違いない。まさにアートだけにとどまらず、国語科としての学習の機会として活用することができたのだ。こうした取り組みが教科横断型の授業として進めることができれば、「生きる力」を育む学習へとつながっていく。



1年生 リフレクションのまとめ

1. きょうのワークショップはどうでしたか。A-Dのあてはまるものを○でかこんでください

A たのしかった 54/55 B まあまあたのしかった 0/55 C あまりたのしくなかった 1/55 D つまらなかった 0/55

そうこたえたわけをおしえてください。

絵を描くのがむずかしかった。(あまり楽しくなかったと答えた児童) 絵を描くのが楽しかった。クレパスで描くのが楽しかった。色鉛筆で塗るのが楽しかった。絵がうまくなった気がするから。色鉛筆とクレパスをいっしょに使って楽しかった。はじめてやったから。想像するのが楽しかった。ドミニク先生が英語で教えてくれて楽しかった。

2. 先生がいごではなしたことはわかりましたか。

A よくわかった 14/55 B まあまあわかった 27/55 C あまりわからなかった 9/55 D わからなかった 4/55 無回答 1/55

3. 先生や友だちと かんたんないごをつかって コミュニケーションができましたか。

A できた 34/55 B まあまあできた 12/55 C あまりできなかった 3/55 D できなかった 5/55 無回答 1/55

4. まんぞくできる さくひんができましたか。

A できた 49/55 B まあまあできた 4/55 C あまりできなかった 1/55 D できなかった 0/55 無回答 1/55

5. かいた生きもの

6. どんなおとをかきましたか。

7. どのようなことをおもいうかべてかきましたか。

カラフルなウサギ(牛、ハムスター、パンダ、、、)を思い浮べた。木の枝でおしゃべりしているリスを想像して描いた。たぬきがエサを食べているところ。かばが吠えているところ。鳴いているところ。歩いているところ。こんな動物がいたらいいな。水辺に水を飲みに来たワニの親子を思い浮べた。かっこいいハイエナを想像して描いた。いつものイグアナではないカラフルなものを描こうとした。

リフレクションについての考察

多くの児童が、「絵を描くこと、色を塗ることが楽しかった。」と回答。少し高いテーブルで、立ちっぱなしの作業にもかかわらず、どの児童も最後までしっかりと取り組んでいたのがとても印象的だった。また、1年生が長時間集中力を持続させていたことにもとても驚いた。先生方の事前の声掛けのおかげで、ワクワク感をもって参加していた児童が多かった。どの作品も既成概念にとらわれないユニークな動物に仕上がりに、児童が想像力を働かせて描いたことがよく分かった。また、ほとんどの児童が自分の作品に満足していた。質問7から、動物が発する音を考えながら描くことで、それぞれの児童が制作過程において、より想像を広げていたことがわかった。多くの児童が、「英語がわかった。」「まあまあわかった。」「英語を使ってコミュニケーションできた。」「まあまあできた。」と回答していた。英語への抵抗が少なく、活動中の反応の良さがここに表れている。色鉛筆とクレパスという、初めての組み合わせが新鮮で良い刺激になったようだ。

1年生 現場の声

ワークショップの事前事後に題材に関連して取り組んだこと

児童が図画の時間に自画全体像を描いたり、人権ポスターを描いたりする際に、英語でアートで教わった描き方を思い出させた。

(黒の輪郭線をしっかり描くことなど)

ワークショップ中、ふだんと違う活動の様子が見られた児童について

絵に自信がなく、どうしても描き出すことのできない児童がスタッフの方の声がけで最後まで描くことができた。「楽しかった」とふり返っていた。別の児童は「初めて絵を描くことを楽しいと思った」とふり返っていた。

ワークショップ全体の感想

カラフルな動物や、色鉛筆とクレパスのDUO、絵の周りにオノマトペを書き入れることなど、子どもの絵の指導に生かしてみたいことがたくさんありました。ありがとうございました。

2年生

ことば：
スイミーを元気にするメッセージ

見たこともない魚たち Fish like I've never seen before

2年生プラン

国語科2年生の「スイミー」は、主人公であるスイミーが一人ぼっちになり、寂しくて不安な気持ちで海の底を泳いでいく中で出会うたくさんの海の生き物によって元気を取り戻していく。というストーリーである。文中にある「見たこともない魚たち。」の一文を取り上げ、スイミーを元気づける、見たこともないカラフルな魚を想像し、描くことを目標に「カラフルフィッシュ」に取り組んでいく。ワークショップの導入部分では、珍しい海の生き物たちの映像をたくさん提示し、児童の意欲を掻き立て、創造性を引き出し、自分なりの造形をイメージしやすくさせる。

また、英語でこれまで学習してきた単語、身近にある簡単な形（トライアングル、スクエア、サークル、スターなど）や色（レッド、ブルー、イエロー、グリーンなど）線（ジグザグ、ストレート、ウェーブ）などのアートの要素を学び、それらを組み合わせて、見たこともないカラフルな魚をカラーマーカーで描いていく。

そして、でき上がったカラフルな魚を手に取り、スイミーを元気づけるためのメッセージを考え、魚の形に切り取ったカードにメッセージを書いていく。

これらの活動を通して、児童は精一杯想像力を働かせ自分だけにしか表すことのできない、カラフルな海の生き物を作っていく。また、暗い海の中を一人ぼっちで仲間を探しながら泳いでいるスイミーへのメッセージを考えることによって、困っている仲間へ寄り添い、励ましていこうとする気持ちを育てることができる。

学習目標

- ・ いろいろな形や線を使って、創造力を働かせ、工夫しながら表現する。
- ・ カラフルな色を使って表現する楽しさを感じながら作品作りに取り組む。
- ・ 学習した単語を口ずさみながら、英語の表現、コミュニケーションを楽しむ。
- ・ 珍しい魚たちに出会った、スイミーの気持ちを想像して作品作りに取り組む。





つながる教科

国語科
外国語活動
特別活動



画材

四つ切り画用紙、ハサミ
黒・カラーマーカー
魚の形のメッセージカード



技法

ドローイング
カラーリング
アウトラインング
カッティング
レタリング



SDGs

海洋資源・海の
豊かさを守ろう



学際的なテーマ

この地球を共有すること
Sharing the planet



KEY WORD

活動中に子どもたちが耳にする主な英単語のリスト

これらの言葉を前もって子どもたちに紹介しておくことより自信をもって活動する手助けになるでしょう。



Technique 技法、テクニック

drawing 描くこと coloring 色づけ outlining 縁取りを描くこと cutting 切ること
lettering レタリング

Elements of Art 美術の要素

line 線 shape 形(2D 平面) color 色

Materials 用具、材料

paper 紙 marker マーカー scissors はさみ

Other art terms その他の用語

zigzag line ズグザグ線 straight line 直線 wavy line 波線 curved line 曲線 square 正方形
circle 円形 triangle 三角形 black 黒 white 白 orange オレンジ色 red 赤色 green 緑色
blue 青色 purple 紫色 pattern 模様、パターン outline 輪郭 draft 下書き fish さかな
encourage/cheer up 励ます message メッセージ strange 見たこともない

題材について

入学してから1年が経った2年生の児童は学校生活にも慣れ、学校生活の中で自分の存在だけでなく、周りの友達の様子やクラスの様子にも目が行くようになってくる。毎日の生活の中で、友だちや上級生とのやりとりから学校生活を豊かに、楽しいものとしていく。各教科の学習にも意欲的に集中して取り組む姿勢が表れ、いろいろな活動や作品作りにも興味を示していく。そうした、児童の興味関心と意欲を損なわないようなプランを考えることが大切である。

今回、2年生のワークショップで取り上げたのは、「カラフルフィッシュ」である。国語科の教科書に取り上げられている「スイミー」から学習に入っていく。「スイミー」は鉄板教材の一つで、教科横断型学習にぴったりの題材であると考えている。

活動の流れ

● 学習活動 ◆ 指導上の留意点

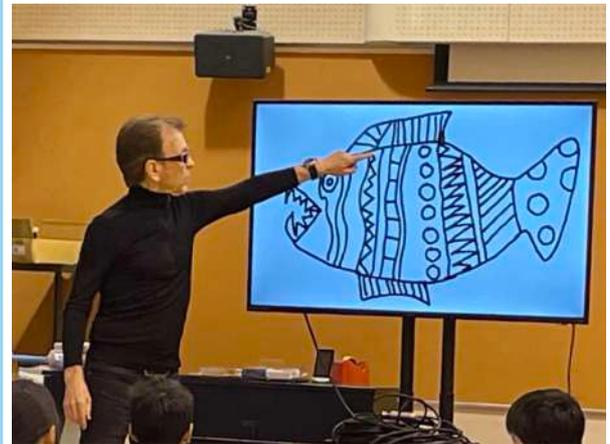
● 簡単な挨拶をする。テーマの説明を聞く。



◆ フランス語や英語、時には日本語も交えてユーモラスに、児童との距離を縮めるようにする。

◆ たくさんのカラフルで変わった形の魚の映像を見せる。

◆ アートの要素を提示し、その使用例を紹介する。



◆ デモンストレーションをする。



● 鉛筆で下書きをする。



● カラーマーカーで色を付けていく。



◆ 自由にのびのびと描く。



◆ 黒で縁取りをする。



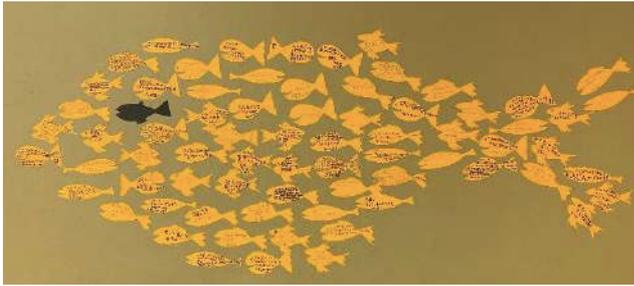
◆ 児童間の対話を促し、迷っている児童には助言をする。



● できた魚を切り取る。



- メッセージをカードを一つの大きな魚の形にして貼る。



- みんなで一緒に振り返りをする。



- スイミーを元気づけるメッセージを魚の形のカードに書く。



- ◆ 自分の取り組みを振り返ったり、友達の作品を見たりして、自由に感想を言い合う。



成果と課題

2年生の児童はみんなワークショップを楽しみにしていた。国語の学習で「スイミー」の内容を理解している児童にとって、イメージしやすい教材だったように思う。特に絵の好きな児童は、「ぼくは、魚も好きだし、絵を描くのも好きだからとっても楽しみにしていたんだ。」と話し、集中して作品作りに取り組んでいた。

途中、担任の先生が話しに来て、集中して取り組む様子が見られた。どの児童も自分が作った作品に満足している様子が見られた。後の振り返りでは、みんなで友だちの絵を観ながら、良いところを見つけ、積極的な意見の交換が見られた。

2年生 リフレクションのまとめ

1. きょうのワークショップはどうでしたか。A~Dのあてはまるものを○でかこんでください。

A たのしかった 45/47 B まあまあたのしかった 1/47 C あまりたのしくなかった 0/47 D つまらなかった 0/47 無回答 1/4

そうこたえたわけをおしえてください。

自分だけのスイミーを作るのが楽しかった。色塗りが楽しかった。自分の好きな魚や形が描けた。きれいな魚を描けたし、英語も聞けたから。はさみで切るのが楽しかった。英語でしゃべれて楽しかった。英語はわからなかったけど、ドミニクさんがやさしかった。きれいな魚を描けた。ドミニクさんにほめてもらった。面白い絵が描けた。初めての人と出会えた。

2. 先生がえいごで はなしたことは わかりましたか。

A よくわかった 9/47 B まあまあわかった 16/47 C あまりわからなかった 16/47 D わからなかった 4/47 無回答 2/47

3. 先生や友だちと かんたんなえいごをつかって コミュニケーションができましたか。

A できた 18/47 B まあまあできた 6/47 C あまりできなかった 9/47 D できなかった 2/47 無回答 12/47

4. まんぞくできる さくひんができましたか。

A できた 35/47 B まあまあできた 4/47 C あまりできなかった 1/47 D できなかった 0/47 無回答 7/47

5. どんなことばをかきましたか。

さがしていたら、兄弟たちが出てくるよ。兄弟が食べられて悲しかったね。でも応援しているよ。スイミーはここで止まってしまう魚ではないよ。頑張って生きて。仲間はあるよ、安心して。一人じゃないよ。いろんな魚にあえてよかったね。いいなかまを見つけようね。応援してるよ。大丈夫。

6. どんなことを思いうかべてこの絵をかきましたか。

かっこよくなれ。スイミーが喜んでる顔を思い浮べた。きれいな色の魚。スイミーが元気になれるような絵。魚がいっしょにたのしくしている。スイミーが不思議なものを見た気分。スイミーを元気づけたい。マグロへの復讐。スイミーが楽しいなと思う魚。スイミーが驚くような魚。スイミー大丈夫かな。幻の魚、伝説の魚を思い浮べた。

7. 今日のワークショップのかんそうをじゆうに書いてください。

見たこともない魚が本当にいるみたいで面白かった。よくわかって楽しかった。いつもの授業と違ってウキウキワクワク。ドミニクさんにうまくできるやり方を教えてもらってうれしかった。英語の勉強ができてうれしかった。先生が写真を撮ってくれたし、ドミニクさんがほめてくれた。珍しい魚をかけてうれしかった。みんなの面白い絵を飾ってドミニクさんが嬉しそうだったので私も大満足。色々な色や形を創造して描くのが楽しかった。またおなじような学習がしたい。ドミニク先生のはなしがよくわかり、いい作品ができた。

リフレクションについての考察

国語科の学習で慣れ親しんだ物語が題材だったので、とてもスムーズに活動に入ることができた。導入部の英語がむずかしかったようだが、色や形などの英単語を自然とリピートし、英語に対する抵抗感は少なかったように思う。既成概念にとらわれない「見たこともない魚たち」をそれぞれがイメージし、オリジナリティあふれるカラフルな作品ができた。スイミーへのメッセージを念頭に、スイミーを元気づけるような魚を描いたという児童も多かった。無回答が目立つので、低学年向けの質問の仕方、文言の検討が必要だと思う。

3年生

ことば：
わたしの建物から出る音

色と音の街 Colorful City Buzz

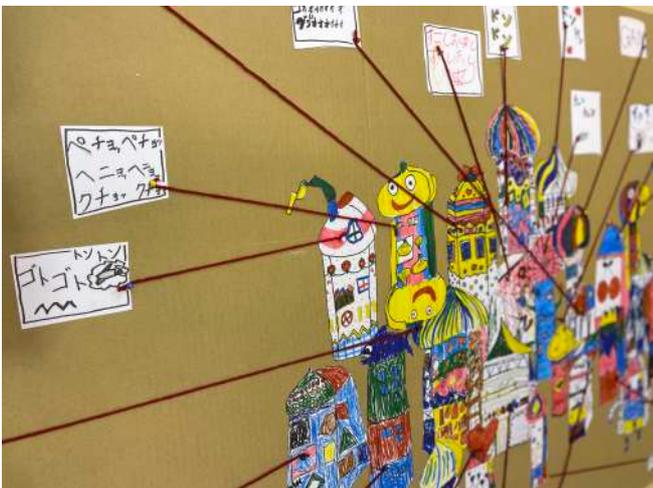
3年生プラン

児童は3年生社会科の学習で、自分の周りの環境、町とコミュニティのつながりについて課題を見つけ探究学習を進めていく。大阪、舞州のゴミ焼却場のデザインでも知られるオーストリアの建築家フンデルトヴァッサーの作品を觀賞し、そのカラフルな作品の魅力に触れることによって興味関心を抱くだろう。その作品を発想の源に、各自がマーカーを使用して、アートの要素を組み合わせ、好きな形、さまざまな色で家を描いて切り抜く。そして、余った画用紙を切り取り、自分が描いた家からどんな音が出ているのかを考え、ガヤガヤ、ぴょんぴょん、ウーウー、キンコンカンコン、ピンポンなどを文字で書いていく。家から出てくる音を考えるとき、児童は自分の家族一人ひとりの生活の様子を思い浮かべるだろう。カラフルな家を描きながら家族に思いを馳せ、楽しく創作活動ができるのではないかと考えている。

最後に、児童が描いた建物を集めてクラスでひとつのカラフルな街を作り、町の音を毛糸でつなげてディスプレイし、言語をアートの要素として表現した協働作品に仕上げる。一人ひとりの作品を組み合わせることによって、カラフルな楽しい街ができる喜びを味わうことだろう。

学習目標

- ・線やパターンなどアートの要素を組み合わせながら、3Dの建物を描く。
- ・カラフルで生き生きとした建物を作る。
- ・作った建物から出てくる音を考え、文字の形やレイアウトを工夫してカードに書く。



発想の源

フリーデンスライヒ・
フンデルトヴァッサー
(アーティスト・建築家)

画材

8つ切り画用紙、黒・カラーマーカー
(プロッキー)、はさみ、マップピン、赤い毛糸

つながる教科

社会科
外国語活動
総合的な学習

学際的なテーマ

人間は自分たちをどう組織しているのか
How we organize ourselves

SDGs

持続可能な都市
住み続けられる街づくりを



技法

ドローイング
カラーリング
アウトライニング
カッティング
レタリング



KEY WORD

活動中に子どもたちが耳にする主な英単語のリスト

これらの言葉を前もって子どもたちに紹介しておく
より自信をもって活動する手助けになるでしょう。



Technique 技法、テクニック

drawing 描くこと coloring 色づけ outlining 縁取りを描くこと cutting 切ること
lettering レタリング

Elements of Art 美術の要素

Line 線 shape 形 (2D 平面) color 色

Materials 用具、材料

paper 紙 marker マーカー scissors はさみ

Other art terms その他の用語

building 建物 city 街 zigzag line ジグザグ線 straight line 直線 wavy line 波線
curved line 曲線 square 正方形 circle 円形 triangle 三角形 black 黒 orange オレンジ色
red 赤色 green 緑色 blue 青色 purple 紫色 pattern 模様、パターン outline 輪郭
draft 下書き sound 音

題材について

児童は2年生の生活科の学習で、自分の家から学校までの通学路の様子や自分の家や学校の周りの様子や特徴を理解している。3年生の社会科では、2年生での学習をもとに校外に出かけていき、聞き取りをしながら、校区の特徴や様子をより詳しく調べ、学習していく。

また、自分の家が校区のどのあたりに位置しているのか、その中で生活する家族の様子や地域との関りについても興味を持って学習に取り組む時期でもある。

そうした児童の興味関心を大切にしながら、制作に取り組み、でき上がった一人ひとりの作品をまとめ、それぞれの建物から出る音を言語として作品の中に入れることで、より生き生きとした一つの街としての協働作品に仕上がるはずである。

活動の流れ

● 学習活動 ◆ 指導上の留意点

- 簡単な挨拶をして、内容の説明をする。
- 作品の特徴を説明する。



- 鉛筆で下描きをする。



- ◆ フランス語や英語、時には日本語も交えながら児童との距離を縮めるようにする。

- ◆ ファンデルトヴァッサーの作品を提示する。



- ◆ 立体的に描くにはどうすればよいのか考えさせる。



● 作品にカラーマーカーで色を塗っていく



◆ 黒で縁取る。



● 出来上がったら切り抜く。



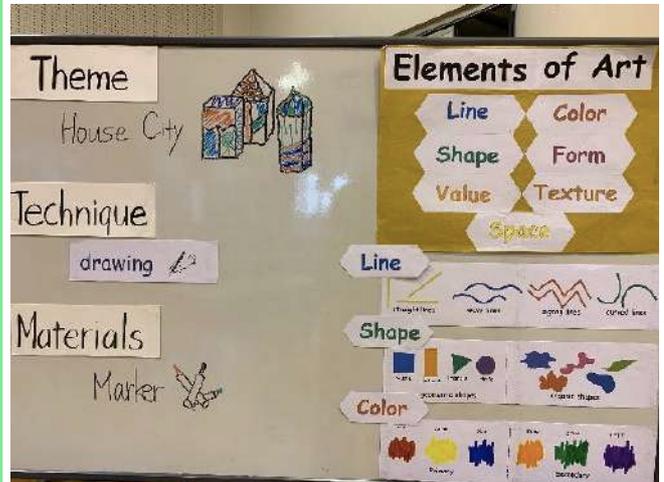
◆ 自分のイメージする音を文字にして、アートの要素のひとつとして色や形で表現する。



◆ デモンストレーションをする。



◆ アートのいろいろな要素を入れるようアドバイスする。



◆ 絵と言葉の組み合わせで伝えたいことを表現する



● みんなで一緒に振り返りをする。



● 家の質感を考えてカードに書く。◆ 字体も工夫する。



◆ 自分の取り組みを振り返ったり、友達作品を見たりして、自由に感想を言い合う。



成果と課題

3年生の児童は、楽しそうにカラフルな建物の制作に取り組んでいた。「家から出る音」を考えると、ある児童は、家族が何をしているか考え、「これは、お兄ちゃんがゲームをして喜んでいる音。これは、お母さんが餃子を焼いている音。これは、お父さんがパソコンで仕事をしている音。」などと友達やスタッフに話しながら音を書いていた。

家族の様子を思い浮かべながら楽しそうに制作活動に取り組むことができた。

ワークショップの最初に、「音を入れる。」ことを伝えていたため、児童はカラフルな建物を描く際、自分の家や家族を思い浮かべながら描いていたのではないと思われる。

3年生リフレクション まとめ

1. ぎょうのワークショップはどうでしたか。A～Dのあてはまるものを○でかこんでください。

A 楽しかった 50/54 B まあまあ楽しかった 2/54 C あまり楽しかった 2/54 D つまらなかった 0/54

そうこたえたわけをおしえてください。

立体的な絵を描く方法を知ることができた。英語のこととかあまりわかっていないけど、かんたんなことならわかったから楽しかった。アートは失敗してもいい作品ができた。想像しながら自分の家が描けて楽しかった。やねの形など考えて、色を工夫するのが楽しかった。ドミニク先生がやさしく面白かった。いろいろな先生が手伝ってくれたり、ほめてくれたりしてくれたのがうれしかった。説明がわかりやすく、頭に入って、うまく作れた。自由に考えてつくれたから。絵を描くのが好き。英語でドミニク先生と話ができた。

2. 先生が英語で話したことはわかりましたか。

A よくわかった 7/54 B まあまあわかった 24/54 C あまりわからなかった 14/54 D わからなかった 7/54 無回答 2/54

3. 先生や友だちとかんたんな英語をつかってコミュニケーションができましたか。

A できた 17/54 B まあまあできた 13/54 C あまりできなかった 4/54 D できなかった 9/54 無回答 1/54

4. 満足できる作品ができましたか。

A できた 46/54 B まあまあできた 6/54 C あまりできなかった 1/54 D できなかった 1/54

5. どのようなことを思いながら描いて、どのような気持ちを表しましたか。

自由な気持ち。ちゃんとかけているかなとワクワクした気持ち。楽しいことを思いながら描いてうれしい気持ちを表した。すごい作品を描いてみんなをおどろかせようという気持ち。芸術家になった気持ち。芸術家になった気分。住みたい家を思いながら描いた。こんな家があったらいいなという思い。色がかぶらないように工夫。かわいくてお姫様が住んでいそうな家を想像しながら描いた。楽しくにぎやかに。むずかしい。

6. 今日のワークショップの感想を自由に書いてください。

ほめられてうれしかった。友達と一緒に見せ合いながらできてたのしかった。ドミニク先生と英語でコミュニケーションがとれてうれしかった。楽しく絵が描けた。満足のいく作品ができた。立体は苦手だったから、うまくできてうれしかった。英語が少しわかったし、こんな絵がかけてうれしかった。アートがもっと好きになった。自由に楽しくカラフルにできた。自分だけの家みたいな感じがした。色々な英語を知ることができた。あまりない機会でのたのしかった。最初はきれいにできないと思っていたが、きれいにできてうれしかった。

リフレクションについての考察

「絵を描くのが好き。」と答えた児童が多かった。日頃から図工に楽しく親しんでいることがよくわかる。「楽しかった。」「またやりたい。」「満足のいく作品ができた。」との回答もとても多く、児童が活動に肯定的で、有意義な時間を過ごしたようで大変喜ばしい。質問5の回答から、「こんな家があったらいいな、こんな家に住みたい、窓を多く・・・」など、児童一人ひとりが、具体的なイメージを持ちながら描いていたことがよくわかる。家から出る音を考えることで、描く対象をととても身近なものにとらえて、具体的なイメージを持ちやすくなったのではないかと推測する。個人的な感想ではあるが、音を意識して描くことで、形は一般的な家ではないが、児童の意識の中に、「house」よりも「home」があったのではないかと思った。「楽しい気持ちを表した。」と答えた児童も多かった。「英語があまりわからなかった。」「わからなかった。」との回答がやや多く、今後の英語での言葉かけ、日本語の分量など工夫が必要である。

4年生

ことば：
できるようになったこと

1/2 成人式 Half Coming-of-Age Ceremony

4年生プラン

児童の中には、毎日の学校生活や家庭生活の中で、自分の成長を確認し、自信をもって行動している児童は少ないように思う。この機会をとらえ、入学してから今までの自分を振り返り、「できるようになったこと」を考え、それを英語で表してみることは児童にとって意義深いものであると考える。これらの活動を通して、自尊心がめばえ、自分の成長を確信するとともに友達の成長にも気づき、一緒に学び高めあってきた互いの大切さに気付くようになる。

また、ポートレート（自画像）を描くことによって、自分の顔の特徴をとらえ、成長の跡が表情にも表れていることに気づくのではないかと期待している。本時の活動は、タブレットに取り込んでおいた顔写真を見ながら、ワンラインドローイングで自画像を描き、切り抜く。台紙に自分が用意した、「できるようになったこと」の英文を一筆書きでフレームのように描き、自画像の周りには、自分をイメージしながらゼンタングルの模様を描いていく。シンプルな画材でも、複数の表現を用いることによって個性豊かな作品となることを願っている。

学習目標

- ・線やパターンを組み合わせながら、自分らしさを生き生きと表現する。
- ・ワンラインドローイングの技法を使って、自画像を描く。
- ・制作プロセスにおいて、自分の成長を確認する。





つながる教科

道徳
外国語活動
総合的な学習



学際的なテーマ

自分を表現する方法
How we express ourselves



画材

八つ切り画用紙、ハサミ
黒・カラーマーカー（プロッ
キー）、スティックのり



技法

ワンラインドローイング
カッティング
ゼンタングル
レタリング



KEY WORD

活動中に子どもたちが耳にする主な英単語のリスト

これらの言葉を前もって子どもたちに紹介しておく
より自信をもって活動する手助けになるでしょう。



Technique 技法、テクニック

one line drawing ワンラインドローイング cutting 切ること Zentangle ゼンタングル
lettering レタリング

Elements of Art 美術の要素

line 線 shape 形 (2D 平面) value 明暗

Materials 用具、材料

paper 紙 marker マーカー scissors はさみ glue のり

Other art terms その他の用語

self-portrait 自画像 observe 観察する zigzag line ジグザグ線 straight line 直線
wavy line 波線 curved line 曲線 square 正方形 circle 円形 triangle 三角形
black and white 白黒 monochrome モノクロ pattern 模様、パターン outline 輪郭
can/can't できる/できない letter 文字 word 単語
paste のりで貼る write 文字を書く

題材について

10歳を機に今の自分を見つめ、10年の歩みをふりかえり、その成長をみんなで喜び合い、明日への意欲と成長につなげることを目標に「二分の一成入式」を行う学校が多くある。

小学校に入学して今まで、どの児童にも学校生活の中でいろいろな場面での成長がみられる。しかし、毎日の生活の中で、児童は自分の成長を確認したり、褒めてもらったりすることはできていないのが実情である。この機会をとらえ、児童はそれぞれ前もって「できるようになったこと」を考え、それを英語担当の先生に英訳してもらった。ワークショップでは、「英語で表現できた。」というだけで児童は自分の成長を感じることができる。また、ポートレート（自画像）を描く活動では、自分の顔をよく観察し、改めて自分の顔の特徴をとらえ、その表情から、小さい頃の自分とは違ったそれぞれの成長に気づいていくだろう。

活動の流れ

● 学習活動 ◆ 指導上の留意点

- 簡単な挨拶をして、内容を説明する。



- 「できるようになったこと」を台紙の周辺に英語で書く。



- ◆ 自画像は一筆書きで、ゼンタングルは画面を分割してから描くと、描きやすいことをデモンストレーションで見せる。

- ◆ ゼンタングルの模様見本を配る。グループ内の対話を促す。



- 画面を分割して、模様（ゼンタングル）を描く。



- 黒マーカーで自画像を一筆書きで描く。



- 描いた自画像を切り取って台紙に貼る。



- ◆ 前もってタブレットに自分の顔写真を撮っておく。
- ◆ いったん描き出したら最後まで紙からペンを上げないように指示する。描けない児童をサポートをする。

- ◆ 貼る場所を相談する。



● みんなで一緒に振り返りをする。



◆ 自分の取り組みを振り返ったり、友達の作品を見たりして、自由に感想を言い合う。



成果と課題

4年生の児童は、初めて取り組むワンラインドロ잉の技法に戸惑いながらも、意欲的に取り組んでいた。「できるようになったこと」を英文で表すのが難しく、時間がかかった児童もいたが、一筆で英文を書く作業に、上級生になったような気持ちになって取り組む児童の姿が見られ、ほほえましかった。

模様のようなゼンタングルにも見本を見ながら、「どのパターンにしようかな。」「この模様が好きだな。」「わたしは、こっちの方がいいな。」などと友達同士話しながら、楽しそうに取り組む姿が見られた。描いているうちに会話もなくなり、集中して取り組む姿が印象的だった。

タブレットに取り込んだ自分の顔をはじめは恥ずかしそうに見ながら、「うまく描けない。」と画用紙の裏に描き直す児童もいたが、それぞれが自分の特徴を捉え、生き生きした自画像がたくさんできてきた。出来上がった作品を見ながら、「これは、〇〇くん。そっくり。」「これは、〇〇ちゃん。分かるね。」「みんな上手。」などと友達や自分の作品を指さしながら、でき上がった作品を見て、満足げな表情の児童が多かった。



4年生リフレクション まとめ

1. 今日のワークショップはどうでしたか。A～Dのあてはまるものを○でかこんでください。

A 楽しかった 43/45 B まあまあ楽しかった 2/45 C あまり楽しくなかった 0/45 D つまらなかった 0/45

そう答えたわけを教えてください。

色々な模様を描くのが楽しかった。想像力がひろがるから。自分の顔を描いたのが楽しかった。一筆描きがおもしろかった。新しい体験ができたから。ドミニク先生がおもしろかった。しばらく自由に描けたから。自分のことがよくわかったから。自画像をはじめ描いたから。一筆描きが初めてだったから。説明がわかりやすかった。

2. 先生が英語で話したことはわかりましたか。

A よくわかった 8/45 B まあまあわかった 21/45 C あまりわからなかった 7/45 D わからなかった 9/45

3. 先生や友だちと かんたんな英語をつかって コミュニケーションができましたか。

A できた 15/45 B まあまあできた 15/45 C あまりできなかった 8/45 D できなかった 7/45

4. 満足できる 作品ができましたか。

A できた 32/45 B まあまあできた 10/45 C あまりできなかった 1/45 D できなかった 2/45

5. これからどんなことに挑戦したいですか。

自分の好きなスポーツをもっと上手になりたい。アートでもっと上手に描けるようになってみたい。ワンラインドロ잉で動物、食べ物、風景などを描いてみたい。もっとむずかしいものを描いてみたい。次はもっとよく見ながら上手に描きたい。英語でもっとはなしができるようになりたい。英語を書けるようになりたい。

6. 今日のワークショップの感想を自由に書いてください。

模様がおしゃれで額縁を英語で書くのが面白かった。はじめはむずかしいと思ったが、アドバイスをきいてうまくいった。英語はあまりわからなかったけど、楽しくできた。英語でコミュニケーションとれるか心配だったけど、やってみると英語だからこそこんなに楽しいんだと思った。細かいところをよく見るのが大切だと分かった。新しいことができて楽しかった。

リフレクションについての考察

英語の筆記体を学んでいない4年生には、額縁を英語のつづきで書くのは大変だろうと心配していたが、それは杞憂に終わり、どの児童も工夫を凝らして文章を仕上げ、とても趣深い作品になった。質問5では自分の得意なスポーツや競技の上達を挙げる児童もいたが、今回の活動を通して「もっとこういうものを描いてみたい。」「次はもっとうまく描きたい。」など創作活動への挑戦を書く児童が多かった。中には「消失点を使ってきれいに風景を描いてみたい。」という回答もあり、美術に対する意欲、向上意識の高さがうかがわれる。またそれと同じくらい、「英語の上達を目指したい。」という回答も多く、英語への興味意欲も高い。この活動がよい刺激になっていればとてもうれしい。事前の伝達不足で、活動が中断する場面があったが、集中が途切れることもなく、落ち着いた雰囲気で行き届いた姿勢がとても印象的だった。出来上がった作品への満足度も高いので、初めてのことに挑戦するワクワク感と達成感を味わってくれていたらうれしい。



5年生

ことば：
わたしのモットー

シンメトリーな仮面 Symmetrical Masks

5年生プラン

顔は人の象徴（シンボル）であり人を表現するためには顔を描く。そのシンボルを覆い隠し別の人格になることができる仮面。奈良に古くから伝わる舞楽面や能面。姉妹都市のオーストラリア・キャンベラや 中国・西安の仮面、その他の世界の国や地域で儀式や祭礼などに用いられてきたさまざまな仮面の画像を鑑賞し、その歴史や意味について考えるきっかけとする。

今回のワークショップでは、仮面の左右対称性に注目し、アートの要素を意識して特徴的なパターンと色を使い、丁寧にカラーリングをしながらシンメトリーな仮面を描いていく。マスクを塗り終わったら、形を切り抜いて立体感を出すように台紙に貼る。「自分のモットー」をデザインしながら背景に描いて仮面と合わせて作品に仕上げていく。

「失敗は成功の母」など自分のお気に入りのことわざや自分のモットーをアートの要素としてデザインしながら 作品に落とし込んでいく。日頃から大切にしている思いやお気に入りの言葉を書くことによって、児童は、自分の内面に目を向け改めて自分の在り方を見つめることができるのではないかと考える。

学習目標

- ・アートの要素を利用し、様々なパターンを組み合わせ、マスクの表情を表現する。
- ・シンメトリーを意識し、マスクの模様を描く。
- ・自分と向き合い、考えたモットーを背景にデザインする。





画材

画用紙、黒・カラーマーカー
(プロッキー)、はさみ、
スティックのり



発想の源

舞楽面、能面、京劇、オセ
アニアやアフリカなど世界
各地と日本のマスク



技法

ドローイング
カラーリング
カッティング
レタリング



つながる教科

算数科
社会科
英語科
総合的な学習



学際的なテーマ

私たちは何者なのか
Who we are



KEY WORD

活動中に子どもたちが耳にする主な英単語のリスト

これらの言葉を前もって子どもたちに紹介しておく
より自信をもって活動する手助けになるでしょう。



Technique 技法、テクニック

drawing 描くこと coloring 色づけ cutting 切ること lettering レタリング

Elements of Art 美術の要素

line 線 shape 形 (2D平面) color 色

Materials 用具、材料

paper 紙 marker マーカー scissors はさみ glue のり

Other art terms その他の用語

mask 仮面 symmetry/symmetrical 左右対称/左右対称の zigzag line ジグザグ線 straight
line 直線 wavy line 波線 curved line 曲線 square 正方形 circle 円形 triangle 三角形
pattern 模様、パターン outline 輪郭 motto モットー、座右の銘 letter 文字 word 単語
write 文字を書く frame 額縁

題材について

高学年の児童は、周囲の人や環境と関わりながら考えたり、活動したりすることができる時期である。社会的な話題や流行の形や色を反映させて作品の主題にしたり、発想したりすることもできる。また、材料などの特徴に進んで働きかけ、思いのままに発想、構成をして意欲的に作品作りに取り組む姿勢が見られる。高学年になると、個性の違いがはっきり表れ、表現活動に苦手意識をもったり、感じたこと考えたことを言葉で表現することを避けたりする傾向が表れてくる。自分が表したいことやイメージと実際に表現したことの違いを感じ、表現することに苦手意識を持つ児童も少なくない。このような発達段階の児童に、「自分にもこんなことができた。満足いく作品が作れた。」といった、達成感や自信を持ってもらえるような活動を考えた。

算数科の指導要領では、「基礎的・基本的な知識・技能は、生活や学習の基盤となるものである。」と述べられている。また、「図形の意味を理解する上で基盤となる素地的な学習活動を取り入れて、数量や図形の意味を実感的に理解できるようにすること。」とある。もはや、算数科独自の学びではなく、他教科や生活と結びついた活動の中で、学習することへの意欲を促していくものであると考える。この「マスク」は6年生で学習する「線対称」の考え方を用いて取り組む活動である。今まで以上に算数的活動が重要視される中で、この表現活動をしながら児童は自然にシンメトリーの定義や美しさを学んでいくであろう。

また、本題材は「仮面」に象徴されている、各国の歴史や文化など国際理解の観点から学習することもできる。担任は、児童の実態を踏まえ、教科横断型学習のどこに位置づけるのかによって、様々なプランが考えられる題材でもある。

活動の流れ

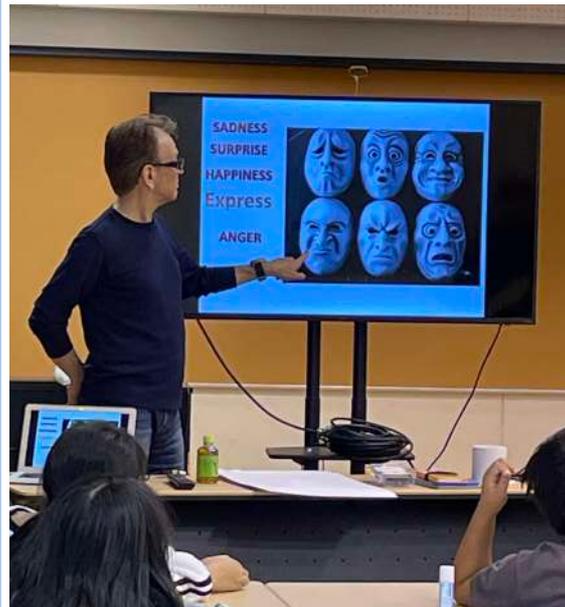
● 学習活動 ◆ 指導上の留意点

- 簡単な挨拶をして、内容の説明をする。



- ◆ フランス語や英語、時には日本語も交えながら児童との距離を縮めるようにする。

- ◆ 日本や海外に伝わるマスク（仮面）の歴史や意味を説明する。



- シンメトリーの技法を使って制作する。

- 画用紙を縦半分におり、鉛筆でアウトラインを描き、切り抜く。



- ◆ デモンストレーションをする。



● カラーマーカーでカラフルな色を付け、仮面の表情を表現する。



◆ 自分らしい表現をしていく。



● 背景に自分の motto を書いていく。



● みんなで一緒にふりかえりをする。

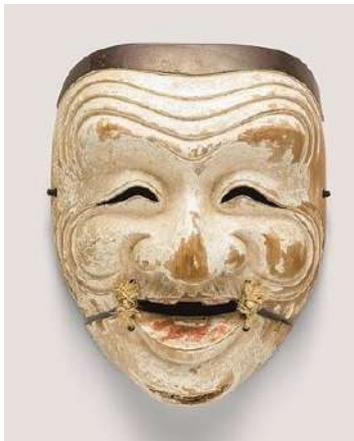
◆ できるだけ多くの文字を自由にデザインして書く。



成果と課題

本題材「マスク」は、短い時間では取り組むのが難しい教材であった。これには、アートの要素や算数のシンメトリーの説明、マスクや仮面にまつわる歴史や国際的な考えなど、盛りだくさんな内容が詰まっている。そうした内容を理解した上で制作に取り組むには多くの時間が必要である。そんな中でも、多くの児童は意欲的に楽しみながら作品作りに取り組んでいた。仮面の持つ特徴を捉え、自分の内面を表すマスクを仕上げていた。背景にモットーを書く際には、書ききれないほどたくさんの言葉を書きこみ、自分の内面を表現した内容が見られた。今回の取り組みを担当が、教科横断型の学習活動として時間をかけて取り組めるなら、より深い内容となるであろう題材である。5年生の児童の振り返りアンケートの内容からもそれらが読み取れた。

ことわざを背景に書いていた児童の中には、普段から興味を持っていることわざをたくさん用意し、デザインしながら背景となる画用紙を埋めていた。活動の終盤には「楽しかったから、最後に一つ、『笑う門には福来る』で終わっておこう。」と独り言を言いながら作品を完成させ満足げな表情であった。



SADNESS
SURPRISE
HAPPINESS
EXPRESS
ANGER
FEAR



MASKS

symmetry



TRANSMIT
Knowledge
Legends
through
Rituals and dances



HIDE



5年生リフレクション まとめ

1. 今日のワークショップはどうでしたか。A～Dのあてはまるものを○でかこんでください。

A 楽しかった 48/50 B まあまあ楽しかった 2/50 C あまり楽しくなかった 0/50 D つまらなかった 0/50

そう答えたわけを教えてください。

色々な仮面のまわりにいるいろいろな文字が書かれていて、その仮面をかぶったら、まわりの文字の言葉がかんがうのなどドキドキした。やっていくと想像がひろがって楽しいから。自分の思っていた仮面ができたから。みんなの仮面がいろいろあっておもしろかった。ほかの人の作品を見るだけで楽しかった。たくさん英語がきけて、知らない単語も知れた。ドミニク先生からアドバイスもらった、ほめられた。消しゴムを使わなかったけどすごくいい作品ができた。英語で図工が新鮮だった。自分の好きな言葉を書いた。友達と一緒に作れた。図工が好き。

2. 先生が英語で話したことはわかりましたか。

A よくわかった 6/50 B まあまあわかった 32/50 C あまりわからなかった 9/50 D わからなかった 3/50

3. 先生や友だちと かんたんな英語をつかって コミュニケーションができましたか。

A できた 13/50 B まあまあできた 18/50 C あまりできなかった 15/50 D できなかった 4/50

4. 満足できる 作品ができましたか。

A できた 36/50 B まあまあできた 12/50 C あまりできなかった 1/50 D できなかった 1/50

5. あなたが書いたモットーはなんですか。

英語では、I like(love) ~など好きなものを文章で。あるいはHappy, Love, Smile, Sunny Dayなど。日本語では、平和、家族、笑顔、勇気、健康、一致団結などの四字熟語。

6. あなたは作ったマスクにどんなイメージをこめましたか。

平和の文字を書いた児童が「平和で暮らせるように」、Catsと書いた児童が「猫が好きというイメージ」など文字とリンクしたイメージもあれば、光と闇のマスクで見方によって違う顔が見えるイメージ、やさしい感じ、自分らしい感じ、独特で不思議なイメージなど、マスクの造形に焦点を当てた回答もあり。

7. 今日のワークショップの感想を自由に書いてください。

友達と楽しく描けた。仮面をかくのも、書く文字をかんがえるのも楽しかった。英語で図工をするなんて考えたこともなかったから楽しかった。作ったことのない仮面ができてうれしかった。ドミニク先生の説明が面白く、丁寧に教えてもらえてうれしかった。先生方にほめられてうれしかった。作品が上手くいかなかったときにみんなが「いいやん」とほめてくれた。英語はあまりわからなかったけど、絵やモットーを上手にかけてよかった。

リフレクションについての考察

活動時の前向きな様子からも推測できたが、「図工が好き。」「英語が好き。」と書いている児童が多く、児童の興味関心に合った活動だったように感じる。「英語があまりわからなかった。」「わからなかった。」と回答した児童も、「満足できる作品ができた。」と活動全般には肯定的な意見だった。「先生や友だちに褒められてうれしかった。」といった文言が目立ち、他者から認められることが児童にはとても大きな意味を持つことを実感した。また、両クラスとも自分の作品への満足度が高く、同時に友だちの作品を鑑賞する様子もみられた。ほとんどの児童が、英語で図工をする、消しゴムを使わない、マーカーを使う、、、などいつもと違う体験に臆することなく、難しいチャレンジを前向きにとらえ、ワクワク感をもって取り組んでいた。集中力もあり積極的な姿勢がとても印象に残っている。児童にタイムマネジメントの大切さを伝えたが、指導者側ももう少しゆとりをもってできるよう、活動の組み立て方や進め方の工夫が必要である。

6年生

ことば：
わたしの大切なもの

生命の樹 Tree of Life

6年生プラン

活動の導入部分で、世界の神話に広く見られるモチーフ「生命の樹」やクリムトが描いた作品を鑑賞し、それらを発想の源にして児童それぞれが自分にとって大切なものをアートの要素と言葉で表現した「生命の樹」の枝を描くことを提示する。ペインティング、ドローイングなどの技法を自由に組み合わせ、言葉をアートの要素の一部として作品に書き入れることで、今までにない、より豊かな表現に挑戦することができる。時代や場所が違ってでも人類に共通する価値や独自の価値観について考え、自己と他者への理解を深め、作品を通して友だちとコミュニケーションしながら作品を仕上げていく楽しさを味わい、協働作品のすばらしさを再認識する機会にしたい。

学習目標

- ・線やパターンなどアートの要素を組み合わせながら、自分らしさを生き生きと表現する。
- ・制作プロセスにおいて、自分の成長を振り返り、成長を感じる。





発想の源

グスタフ・クリムト(画家)



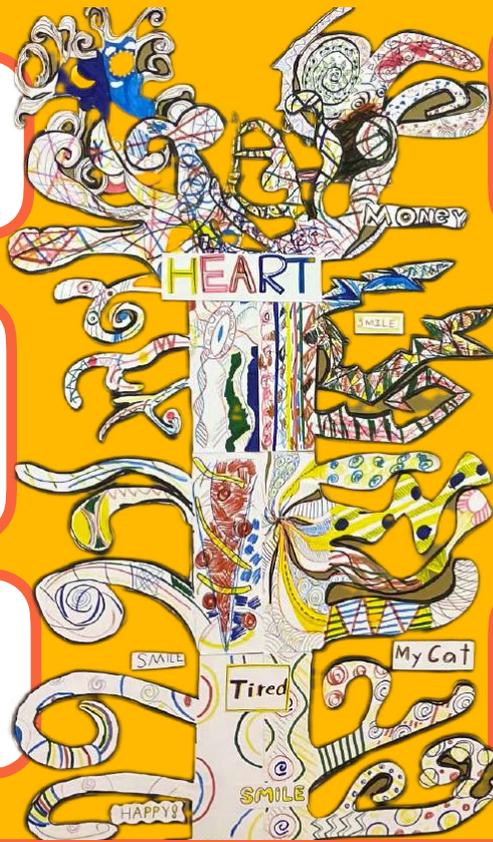
つながる教科

社会科
英語科
総合的な学習



SDGs

陸の豊かさを守ろう



画材

四つ切り画用紙、ハサミ
黒・カラーマーカー



技法

ドローイング
カラーリング
アウトライニング
カッティング
レタリング



学際的なテーマ

わたしたちは何者なのか
Who we are



KEY WORD

活動中に子どもたちが耳にする主な英単語のリスト

これらの言葉を前もって子どもたちに紹介しておく
より自信をもって活動する手助けになるでしょう。



Technique 技法、テクニック

drawing 描くこと coloring 色づけ outlining 縁取りを描くこと cutting 切ること
lettering レタリング

Elements of Art 美術の要素

line 線 color 色

Materials 用具、材料

paper 紙 marker マーカー scissors はさみ

Other art terms その他の用語

Tree of Life 生命の樹 important 重要な treasure 大切な人、大切なもの、宝物
straight line 直線 wavy line 波線 curved line 曲線 square 正方形 circle 円形
triangle 三角形 pattern 模様、パターン letter 文字 word 単語
write 文字を書く

題材について

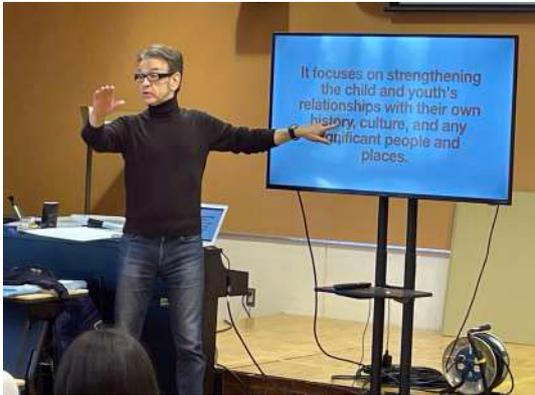
卒業を間近に控える6年生児童は、各教科の中でまとめの学習に入って行く。児童は、それぞれの学習の中で小学校生活を振り返るとともに、家族や友だち、先生など周囲との関りによって成長したことに気づいていく。

この時期に自分が大切に思ってきたこと、大切にしてきたものを考え、表現する時間を取ることで、じっくりと自分を見つめ直したり、支えてくれた人々への感謝の気持ちを持ったりする機会となることを目指す。各クラス2本の大木を協働制作するにあたり、自分の制作パートや上下左右のつながりを考えて、友だちとコミュニケーションをとり、作品に反映させる必要がある。みんなで相談しながら自分のアイデアを生かし、協働作品の良さを感じ仕上がりを楽しむ機会になればと考えている。

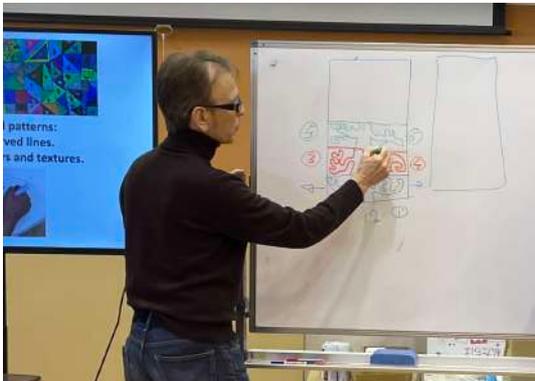
活動の流れ

● 学習活動 ◆ 指導上の留意点

- 簡単な挨拶をして、内容の説明をする。



- 自分が描く部分を確認する



- 鉛筆で下書きし、カラーマーカーで描きはじめる



- 世界の神話に広く見られるモチーフ「生命の樹」やクリムトが描いた作品を鑑賞し、創作のアイデアを膨らませる。



- ◆ デモンストレーションをする



● 友だちの作品の色や模様との調和も考えながら、さまざまなアートの要素を入れこんでのびのびとカラフルに描く。



● 黒の効果を考えて縁取る。



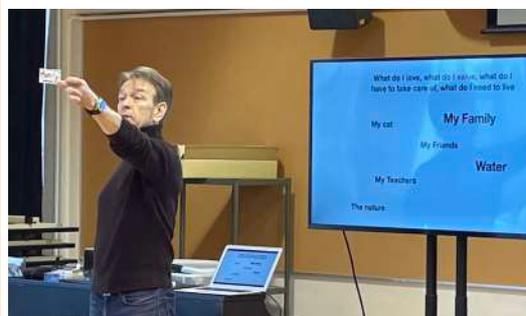
● 枝の形に切り抜く。



◆ とんだり上下のつながりを確認する



● 考えてきた「大切なもの」を紙片に書く。



- でき上がってきた作品を置いていく。



成果と課題

児童らは最初、協働作品に戸惑いを見せていたが、内容を理解した児童の中から、「幹の太さが合うように描く前につなげてみよう。」と声をかけ、幹のアウトラインだけを下書きしてから始めるといった光景が見られた。自分たちの作品が一つの作品になるということで心の一体感が生まれ、互いに声を掛け合い、和やかな雰囲気の中で活動が進んでいった。

次々とでき上がってくる作品を講師が並べていると、一緒になってアイデアを出す児童も出てきた。

でき上がった作品を見て、「おーっ！」と声を上げるなど、どの児童も満足げな様子であった。

また、自由に好きな言葉や大切にしてきた言葉を添えることで、改めて自分の中で大切にしてきたことを振り返り、表現し、実感することができたのではないだろうか。友達との協働作品を観て、その出来栄の良さに驚き、協力することの大切さを改めて感じた瞬間だったように思う。

6年生リフレクション まとめ

1. ぎょうのワークショップはどうでしたか。A～Dのあてはまるものを○でかこんでください。

A 楽しかった 30/47 B まあまあ楽しかった 15/47 C あまり楽しくなかった 2/47 D つまらなかった 0/47

そうこたえたわけをおしえてください。

A, Bの理由→普段と違った授業だった。英語とアートの組み合わせが新鮮だった。普段描かない絵を描いた。自由に描くことができた。始めは難しいと思っていたけど、意外とできた。カッターで切るのが楽しかった。ほめてもらえた。みんなはどんなのにするかの科わくわくした。英語はわからなかったけど創るのは楽しかった。何も考えずに直感で描いてもアートになって楽しかった。普段は小さく描いてしまうが、久しぶりに大胆に描けた。英語をダイレクトに感じた。みんなで協力できた。

Cの理由→説明が長すぎた。抽象的な絵の意味についての説明がなかった。時間がぎりぎりだった。

2. 先生が英語で話したことはわかりましたか。

A よくわかった 3/47 B まあまあわかった 24/47 C あまりわからなかった 16/47 D わからなかった 4/47

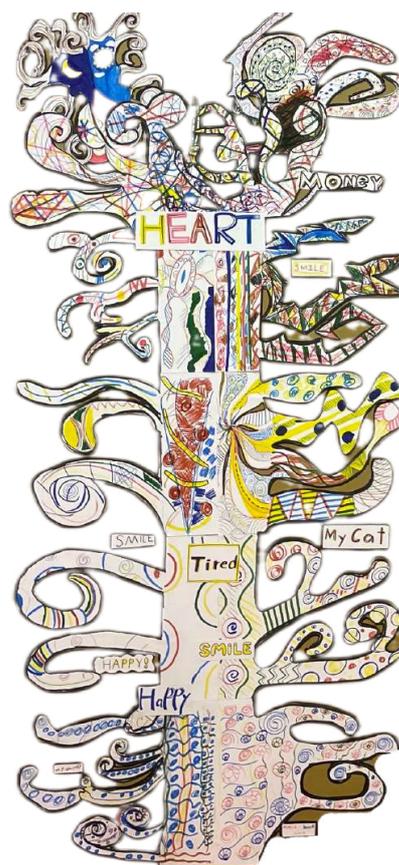
3. 先生や友だちと かんたんな英語をつかって コミュニケーションができましたか。

A しっかり取り組めた 23/47 B まあまあ 22/47 C あまり取り組めなかった 1/47 D できなかった 1/47

リフレクションについての考察

指導側の反省としては、説明時間が長かったため、創作活動時間が短くなった。実際、振り返りシートでそのことを書いていた児童もいた。また、事前に準備していただいた「たいせつにしているもの」を作品として活かすことができなかった。振り返りシートにおいて、児童の内面を引き出すような質問にすべきであった。

短い時間の中でも、児童は集中して取り組み、一人ひとり自由な表現活動を楽しみ、出来上がった作品は素晴らしいものであった。振り返りシートに、「一人ひとりのデザインが違って素敵だった。」と友だちの作品の良さに気づいた児童もあり、「友だちとコミュニケーションを図りながら取り組めた。」と書いていた児童はいたが、「みんなでひとつの作品を創り上げる良さや楽しさを感じた。」という回答は少なかった。



みんなのギャラリー Whole School Art Showcase

1年





3年

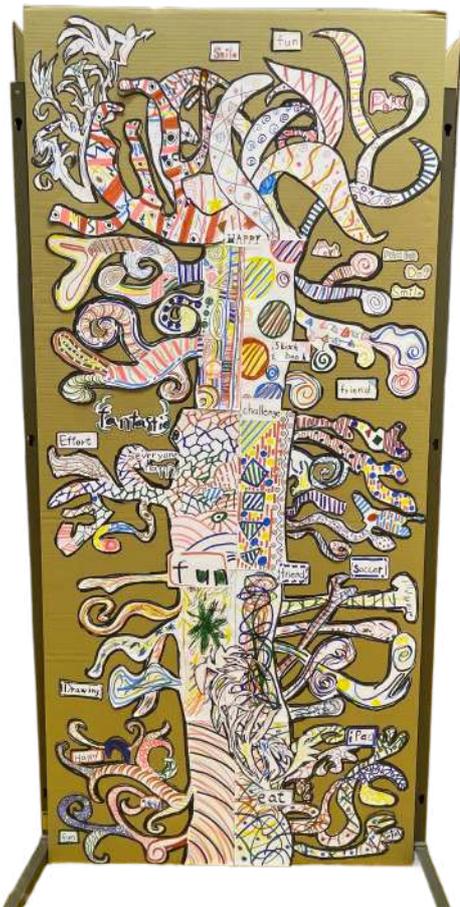


4年



5年





1年生 First Grade

奈良市立左京小学校 1年生担任 丹野 恵美 Homeroom Teacher Emi Tanno

1年生「英語でアート」を終えて

昨年度ドミニク先生が本校で6年生を対象に「英語でアート」の授業をされ、はじめてその作品を見た。限られた時間の中でどのような言葉がけのもと完成したのかがとても気になっていた中、今年度は全学年を対象に指導してもらえることとなり、私の興味関心はさらに高まった。

1年生は、色鉛筆とクレパスを使い動物を描くことになった。事前に一人一人の描く動物を決めておき、どのような音その動物が出すのかを考えさせた。いざ授業が始まると、まずドミニク先生は、子どもたちに大まかな流れと描き方を説明した後、大きな机の周りをぐるり囲ませ、実際にやって見せた。「すごい」「早くやりたい」「もっとやって」と子どもたちの興味関心、そしてワクワク感が高まった瞬間だったように感じた。

私自身、「クレパスには、絵の具」の概念が強くあり、クレパスで描いた絵や模様を絵の具で弾かせて描く指導を今まではしてきたが、「色鉛筆にクレパス」という今までおこなったことのない方法で作品が作り上げられ、とても感銘を受けた。黒く縁取りをした事で描いたものがはっきりとし、言葉を付け加えたことで動きが出たように感じた。子どもたちの描く音は私の想像を超え、子どもたちがそれぞれの動物をどのように捉えているのかがよくわかった。以前は自身の描く絵に自信がもてず、なかなか作業の進まなかった児童もドミニク先生の指導で、自信を持って描けていたように感じた。管段は、弱々しくクレパスを使う児童ではあったが、紙の色が見えなくなるまで力いっぱい塗り潰しすすめ、描きたいものを紙いっぱいに描けていたのには驚かされた。その後この児童は、描くことに自信を付けたようで絵を描く際、迷いがなくなり手が止まることもなくなった。また、縁取りをする技法を習い、上手く活用することもできている。

他にも描くことに自信のある児童は、最初、小さく描いていた動物をドミニク先生のアドバイスで紙いっぱいに大きく描き足し、さらに自信をつけて描いている姿が見られた。言葉がけやアドバイスが子どもたちに自信と意欲を持たせたのだと思う。ドミニク先生が、作品の作り上げ方を短時間で最初から完成するまでを見せてくださった事で、見通しを持って取り組めた児童も多くいたように思う。

今後、可能であればこの活動を継続していくことで、描くことへの抵抗がある子どもたちにとっても、また描くことが好きな子どもたちにとっても、描くことへの自信や意欲となってくれると思う。



2年生 Second Grade

奈良市立左京小学校 2年生担任 坂本 駿也 Homeroom Teacher Shunya Sakamoto

子どもの変容について

子どもたちは、普段から図工やもの作りが好きで、比較的授業に意欲的に取り組んだり、休み時間に折り紙などに取り組んだりしている。しかし、やり切るという面については不十分だと感じていた。具体的には、色を塗りきらずに、これくらいいいという気持ちで終えてしまったり、教師に「これでいいですか？」と何度も質問をしたり、助言をしても、「もう終わりにしたいから」とやめてしまったりという姿が見られる。また、自分の表現したいものがなかなか定まらずに、活動するまでに時間がかかる子どももいる。

今回のワークショップでは、それらの姿の改善があらゆる場面で見ることができた。まず、色の塗り方は、細部まで色を塗りきりたいという気持ちや、時間が足りないもっと塗りたいという気持ちが見られた。また、自由にカラフルに塗り込むことに楽しみを感じており、もっとやりたいという意欲も感じられた。さらに、いつもは「これでいいですか？」と聞いてくる子どもは、「こんな風になったから見てください。」という言葉に変容し、教師が求めるものを考えて表現するという姿勢ではなく、自分が表現したものを見てほしいという姿勢に変わっていた。また、活動するまでに時間がかかる子どもも、スムーズに活動に入ることができ、いつもより作品作りに没頭することができていた。

また、ワークショップが終わった後も、できるだけ塗り込むことや、最後までやり切る姿勢、自分の作品を作り上げて見てほしいという姿勢は継続しており、普段の授業でたくさんそのような姿を見ることができる。

ワークショップについて

今回のワークショップは、子どもたちにとって大きな経験になったと感じた。その理由として、本物に触れることができたという点が大きいの。芸術家であるドミニクさんをはじめとした講師をしてくださった方々の指導を受けることができることを、子どもたちは以前からとても楽しみにしていた。そして、私たち教師の指導する図工よりも、より専門性の高い指導を受けられるのではないかと、それはきっと楽しいものではないかという期待感が子どもたちから見られた。また、そんな専門性の高い講師の方々と関わりをもったことを、誇らしげに感じている様子だった。また、本物の英語に触れることができた経験も大きかった。子どもたちは年間60回のモジュール学習によって英語を学習しているが、すべてデジタル教材であり、発音が合っているのかや、これで伝わるのかという部分が曖昧であった。しかし今回、生の英語を聞き取れたという体験が自信となったり、自分たちが話した英語が伝わったという体験が自信となったりと、子どもたちの中に自信が生まれていることを感じた。これらのことから、ワークショップでは、本物に触れることができたことの価値が非常に高いと感じた。

さらに子どもたちにとっていい経験となったことは、全員で同じ目標を持ってひとつの作品を作り上げたことだと感じる。普段の授業では、同じテーマで取り組むが、主に個人で制作をして作品を完成させる。また展示についても、並べて展示はするが、鑑賞対象は個人である。しかし、今回のワークショップでは、「スイミーを元気づけるために、カラフルな魚を作る」というテーマのもと、制作は個人で行ったが、展示した際の鑑賞対象が全体であった。このことから、子どもたちは、みんなでひとつものを作り上げた達成感や、自分の作品がその中にあるという所属感や嬉しさを感じていたように感じた。普段なかなか行わない、全体でひとつのものを作り上げる活動の価値の高さを感じることができた。

言葉を入れたアートについて

2年生にとって、「言葉を入れる」ことはとても有効な表現の仕方だと感じた。低学年は、想像力のつたなさ、表現技法の知識を知らないなどの面から、作品に表現したことが相手に伝わりにくいということが多くあると感じる。子どもたちはひとつの作品にたくさんの意味を込めていると考える。それを、作品に言葉を入れることで表現させることで、自分の伝えたいことがより相手に伝わるという自信になると感じる。また、鑑賞する側に立った際でも、言葉があるおかげで、その作品に込めた意図が読み取りやすくなると感じる。また今回のワークショップでは、言葉を入れた子どもたちの魚を使って、大きな魚を表現する展示を行ってくださったので、子どもたちが、友だちの考えをより吸収しやすくなっていると感じた。

5年生 Fifth Grade

奈良市立左京小学校 5年生担任 安部ひかり Homeroom Teacher Hikari Abe

事前に「英語でアート」について伝えると、子どもたちはドミニク先生と会えることをとても楽しみにしていました。近年はコロナウイルスの影響もあり、外国語を学習していても、教科書の音声や教師の話す声以外の英語に触れる機会は少なかったと思います。そのため、簡単ですが、「Hello.」「OK.」「Thank you.」「Help me.」などの自分たちが知っている言葉を投げかけ、それに対する返事がかえってくるという、子どもたちにとって嬉しい経験になりました。外国の方の話す内容が分かる・そして自分の使った英語がきちんと伝わる、ということは、外国語学習やコミュニケーション活動のための大きな動機づけにもなると感じました。

当日、子どもたちは全ての英語を理解できるわけではありませんでしたが、先生の表情やジェスチャー、板書を元に、指示を理解しようと熱心に聞いていました。全体への指導はもちろん、その後もドミニク先生やアシスタントの先生が丁寧に見回ったり声をかけてくださったりしたことで、子どもたちも安心したように見えました。特に、自分の隣に座って教えてもらった児童は、ワークショップ後、「ドミニク先生に褒めてもらった!」と、友だちと嬉しそうに話していました。

作品の背景に言葉を入れる活動は、机ではなく床を使って広々と書いていきました。自由に動き、友だちと肩を並べながら文字を書く姿がたくさん見られました。同じグループ内で作品を見合い、褒め合いながら、作品の完成を目指している様子でした。

今回のワークショップのような、消しゴムを用いず一発書きという経験は、これまで子どもたちにとって多くありませんでした。緊張している児童も多かったですが、いざ一歩踏み出したグループの仲間の様子を見て、じゃあ自分も、と描き始める児童が徐々に増えていきました。間違ふことを恐れつい慎重になりがちな左京の子どもたち、間違いを恐れず受け入れて次に繋げる、失敗さえも成功に変えていこうとする姿勢を、今後の生活や様々な学習にも活かしてほしいと思いました。



「英語でアート」ワークショップのふりかえり

Reflections on the 'Art in English' Workshops at Nara Municipal Sakyo Elementary School

奈良市立左京小学校 校長 佐々木 幸充 Contribution by Principal Yukimitsu Sasaki

英語でアートの取組を本校で実施いただいて、今年度で3年目となります。過去2年度は、6年生の児童がアート活動に取り組みました。

年度当初に、ドミニク・ルトランジェ先生から、今年度、本校で1年生から6年生まですべての学年で実施していただけというお話をいただきました。私は今年度、左京小学校に着任したばかりですので、過去の活動の様子が分からなかったため、前年度の活動の写真を見せていただき、また、子どもたちの感想を読ませていただきました。過去の子どもたちの感想は、「楽しかった。またやりたい」「もう一度やりたくなった」「英語で学べるのでよかった」「描き始めたら止まらなくなった。またやってみたい」と、とても充実した時間、学び、学習となったことが伝わってきました。この感想を読ませていただき、全学年で実施していただけたというお話をいただいたことが、大変貴重であると感じました。しかし、この時点では、私は実際に子どもたちの活動の様子を見たことがなかったので、創作活動に集中することが難しい子ども、図画工作等に苦手意識を持っている子どもなど、さまざまな子どもたちが在籍している中で、さらに、オールイングリッシュということで活動は成立するのかな、大丈夫かなと、不安も同時に抱いておりました。

しかし、実際に活動の様子や子どもたちの様子を参観し、その不安は一気に払拭されました。子どもたちが自分の作品に向き合って、とても集中して取り組んでいるのではないですか、集中というより夢中になって自分のイメージを膨らませ、ペンやハサミをもって、ドミニク・ルトランジェ先生から教えていただいた作品イメージやテーマに沿いながらも、一人ひとりが思い思いに取り組んでいる姿があり、とても驚きました。私が参観したすべての学年で、そのような子どもたちの様子を見ることができました。私が、教室の後ろからガラガラとドアを開けて教室に入っていくと子どもたちは誰が来たのかと、後ろを振り向くことが多いのですが、「英語でアート」の活動では振り向く姿が見られず、制作活動に夢中になっていました。子どもたちの夢中になっている姿に何故だろうと考えさせられるくらいでした。それは、きっと、「ドミニク・ルトランジェ先生の本物のアートに触れることができた」「本物のアートを教えていただくことができた」ことが大きいのではないかと思います。また、英語という言葉の壁は、この「英語でアート」の時間には関係がありませんでした。子どもたちがドミニク・ルトランジェ先生の笑いを交えながら説明してくださる、その話を一生懸命に聴いていました。子どもたちが聴きたい、知りたい、もっと話したい、という気持ちが自然と高まるような投げかけや、興味や関心に訴えかける活動を設定してくださっていたのだと思います。ドミニク・ルトランジェ先生をはじめ、スタッフのみなさま方と子どもたちとは、英語でのやりとりでしたが、児童の気持ちや思いが通じるということを目の当たりにしました。

このような活動をとおして出来上がった子どもたちの作品は、どれも子どもたちの気持ちが素直に、ストレートに表現され、まさにアート作品だと感心させられました。

このような本物のアートや英語に触れ、学ぶ機会を全校児童に与えてくださり、子どもたちにとってとても貴重な経験になったと思います。

ドミニク・ルトランジェ先生をはじめ、多くのスタッフのみなさまが子どもたちの指導にあたってくださり、本当にありがとうございました。感謝申し上げます。

「英語でアート」ワークショップをふりかえって

Reflections on the 'Art in English' Workshop

奈良市立左京小学校 教務主任 堀内 大輔 Academic Coordinator Daisuke Horiuchi

どの学年も「英語でアート」という名前を聞くだけで、児童は「楽しそう。」と感じたようで、ドミニク先生達が来ることを楽しみにしていた。当日もドミニク先生の身振りや表情から、分からない英語でも「分かつろう」とする児童の姿がみられた。

1年生から6年生までの全体を通して感じたことは、自分の気持ちや考えを言葉で表現することが難しい児童が「アート」という手段を使って、表現できた素晴らしさである。ドミニク先生の説明を聞いて、「自分はこうしたい！」と思ったことを、早く描きたいので、一部の児童は、説明を聞いているときからソワソワし始めていた。終了の時間がきても、まだ終わらず、もっと描きたいと思っている児童もいた。

また、普段学んでいる英語を外国人に話すという経験も児童にとって大きなものになった。恥ずかしそうにしていた児童も、ユーモアいっぱいのだミニク先生に話しかけられ、英語で返答ができた時に嬉しそうな表情をしていた。小学生の時期に、本物のアートや英語に触れることができた児童は羨ましいと思った。

一方で課題として、「英語」と「アート」のバランスが難しいとも感じた。「アート」をより良いものにしようと思ったら、「英語」だけで伝えても、児童の英語力はまだまだ足りないので、日本語への通訳が増えてしまう。しかし、教師としては、分からないなりに想像して、ドミニク先生が何を言っているのか分かつろうとする気持ちが大切だと思っているので、できるだけ英語で話をしてほしいと思っている。しかし、分からない英語が多過ぎると、児童は前向きな気持ちを失ってしまうので、適度な通訳は必要であるとも思う。児童は良い作品を作りたいので、日本語で通訳してもらった方が、嬉しそうでもある。その辺りのバランスが大事だし、「英語でアート」の難しさだと思った。

このような経験から、「英語でアート」の授業で終わるのではなく、これをきっかけに、アートに興味をもったり、もっと英語の勉強をがんばろうと思ったりする児童が増えるような働きかけを、教師はしていきたいと思う。



「英語でアート」ワークショップを実施して

Implementing 'Art in English' Workshops at Nara Municipal Seibi Elementary School

奈良市立済美小学校 校長 勝谷 征彦 Contribution by Principal Masahiko Katsutani

このお話を紹介いただき、取り組んでいくに当たり、学校創立150周年を迎えた本校が、校区の歴史や伝統と地域や保護者の皆様による支援に対し改めて感謝するとともに、これからの済美小学校が新たな歴史を刻んでいくはじめの一歩となる活動にしたいという気持ちになりました。そこで、全校児童462名による協働作品にしたいと思い切ってお願いしたところ、快く引き受けてくださいました。

ワークショップでは1年生から6年生までそれぞれに設定されたテーマに基づき、子どもたちは自由な発想で思い思いの形、色で制作しました。制作中は、ドミニク先生から英語でコミュニケーションを図っていただきながら、創造することやものづくりの楽しさを存分に体験しておりました。更に下校の見送りまでしていただき、笑顔であいさつしながら下校している子どもたちを見ていると、人と人とのつながりの大切さも感じることができました。このように作品のみならず一人一人の子どもを大切に扱っておられたドミニク先生の様子や、意欲的に取り組んでいた子どもたちの姿から、「うまく作ろう、描こう」ではなく、「自由に」「楽しく」表現していくことの大切さを改めて実感しているところです。

また、ワークショップ当日欠席していた児童が、「自分も参加して作りたい」と休み時間に熱心に取り組んでいる姿がありました。このような思いや行動も本取組によって得られた子どもたちの変容です。

今回の協働作品は、ドミニク先生から「THE WORLD WE LOVE」というタイトルに、児童が考えた「咲150（さいこう）！皆の芸術咲きほこる」をサブタイトルを加え、11月18日になら100年会館で実施した創立150周年記念式典の会場で披露させていただきました。この素晴らしい作品を、どの場所にどのように展示すればよいか教職員でアイデアや工夫を出し合ったのもよい思い出となりました。



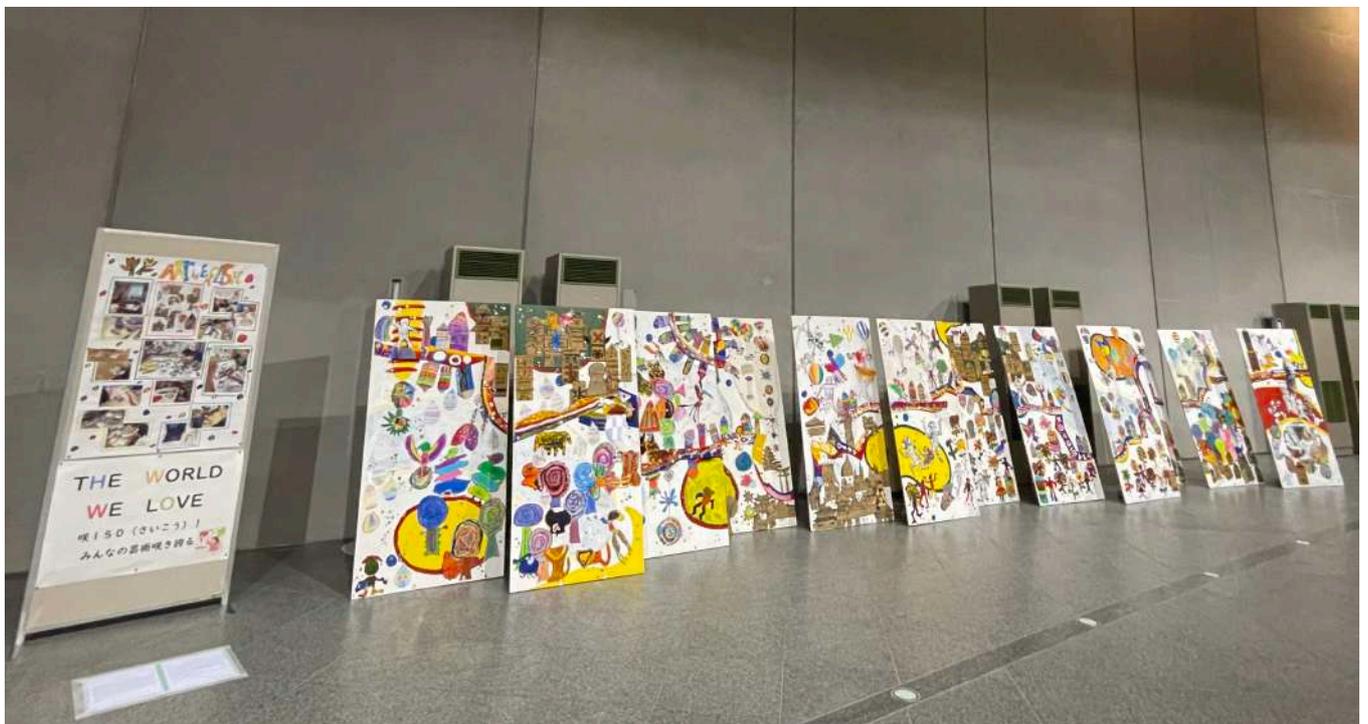
協働作品例 Whole School Artwork

奈良市立済美小学校 Nara Municipal Seibi Elementary School

創立150周年記念作品「THE WORLD WE LOVE 一咲150! 皆の芸術咲きほこる一」2023年11月18日、なら100年会館に展示
"THE WORLD WE LOVE - Saikou! (The Best) Everyone's Art is in full bloom -"

Showcased at Nara Centennial Hall on November 18th 2023, as part of the 150th Anniversary Celebration.

全校児童と有志の先生による協働作品



全校児童生徒と有志の先生による協働作品

毎日新聞 2022年5月24日 Mainichi Newspaper, May 24, 2022



曾爾山 元気に羽ばたく鳥や四季が一度に訪れる不思議な山。曾爾村立曾爾小中学校（義務教育学校）の全児童生徒が描いた絵が、一つのカラフルなアート作品になった。外国人アーティストから手ほどきを受け、2日ばかりで完成。子どもらがいっつも鑑賞できるように校内に展示されている。
 【広瀬晃子】

みんなの想像 芸術の山に



兵庫県在住でフランス出身のアーティスト、ドミニク・ルトランジェが中心となり、2019年から全国の学校で実施している体験型授業の一環。英語を通して芸術に触れてもらうのが目的。授業は12、13両日あり、1〜9年生計62人が受けたりした後、制作に取りかかった。

曾爾小中校内で展示

仏アーティストから手ほどき

テーマは「友達、村、コミュニティ、そして私」。子どもらは画用紙や段ボールに色とりどりの絵の具やフェルトペンを使い、想像を膨らませながら思い思いの作品を描いた。中には、曾爾村の景勝地・お亀池や村の伝説にちなんだ動物を表現したものも。友人や教師の顔を一筆書きで表現した肖像画にも挑戦した。完成した一枚一枚の絵はドミニクさんが校舎内でも曾爾小中学校で

た。子どもたちは、プロの作品を鑑賞したり、描き方のアドバイスなどを受けた後、制作に取りかかった。

6年の綿引理佐さん（11）は「みんなの思いが詰まった作品になった。『魅力的な村』になったと思う。英語での授業も楽しかった」と笑顔を見せた。桜が咲いたり、スキが揺れたりする山を描いた6年の田合真一さん（11）は「こんな山があったら面白いと想像するのがすごく楽しかった」と振り返った。

ドミニクさんは「英語を生かしてみんなとやりとりしたことや、力を合わせて作品を作ることの面白さを感じてもらえた。うれしい」と話していた。



指導者のフランス人アーティスト、ドミニク・ルトランジェさん

アート x ことばのアクティブ・ラーニング

創作を軸にした小学生のワークショップ実践集

監修：岩坂泰子 同志社女子大学

アート指導：ドミニク・ルトランジェ

実践報告：「英語でアート」佐伯敬子 小川恵美 ルトランジェ治美

メールアドレス：artinenglish2022@gmail.com

発行：2024年2月

助成：本冊子は、科学研究費助成事業基礎研究（C）「図画工作科との連携による
外国語授業における児童の発達の研究」の助成によって作成されました。

Active Learning through Art and Language

A Collection of Workshop Practices for Elementary Students Focused on Creation

Supervised by: Yasuko Iwasaka, Doshisha Women's College of Liberal Arts

Art Instruction by: Dominique Lutringer

Practice Report: 'Art in English', Keiko Saeki Emi Ogawa Harumi Lutringer

Mail: artinenglish2022@gmail.com

Published: February 2024

Supported by: This booklet was created with the support of the Scientific Research Fund Grant-in-Aid for Basic Research (C), 'Study on the Development of Children in Foreign Language Classes through Collaboration with Art and Crafts'.

無断で本冊子の全体または一部の複写、複製、転載を禁じます。

© 2024 Art in English. All Rights Reserved.

英語でアート 

ART IN ENGLISH